

の子ども育成会が一体となり実行委員会を結成し、スポーツに関しては体育協会が中心となり、各協会ごとの実行委員会が結成されこの行事がくりひろげられました。

〔昭49・9「広報やぶき」抜粋〕

4 文 化

(1) 文学活動

三九〇 〔昭和二三年北方芸術派結成〕

北方芸術派

新文人の結合

矢吹万部新鋭文学人が三日矢吹校に参集、北方芸術派を組織、大滝清雄（三神中） 円谷秀雄（同） 菊地真二（中畑中） 五十嵐京子（安積高等） 赤田ハツ子、小林定男（矢中） 山家昌作（中畑中） 氏等が中心となり、文学の復興に新鋭文学人の結合を企図、同志の参加を求めているが、第一回の試みとして六月初旬短篇作の発表、批評、討論を行う予定である。

〔昭23・5・9「やぶきタイムス」抜粋〕

三九一 〔昭和二三年矢吹文学同人募集〕

矢吹文学同人ヲ募ル

文学愛好ノ諸君、矢吹文学ヲ作ラウデハナイカ、今迄ノ我々ハ
楽シミモ喜ビモ悲シミモ小サイ独リノ胸ニ秘メテオイタ、シカシ
同好ノ士デ相ヒ集ヒ語リ合ハウデハナイカ、自然、人間、社会、
歴史我々ノ感覚ハ鋭ク感情ハ豊デアリ情熱ハ火ノ如ク燃エテル筈
ダ

文学愛好者ノ諸君、サ、ヤカナガラ矢吹文学ヲ生ミ出サウデハ
ナイカ、コ、ハ矢吹文学ヲ誕生サセントシテアル同好ノ士ノ御参
加ヲ求ム

連絡先は矢吹町中畑新田幸福寺内

千 葉 精 吾 宛

〔昭23・10・24「やぶきタイムス」抜粋〕

三年ほど前でしたか、私が公民館長を仰せつかった当時、このことについて町の若い方々から熱心に話しかけられたが、ついのびのびになっていましたもので今年に入って公民館事業計画の一つに取り入れて頂き具体化のはこびになったことは、発起人各位のお骨折りによるものと感謝に堪えません。

最近非常に文学愛好者が町にふえ、ことに多忙な主婦に目立っていることは、趣味や余技の問題でなく、健全な家庭への指向であり祈りであるとさえ思われます。なぜなら、悩み、疲かれ、忙殺される日々の暮しに対して、働きながら、読・み、書・き、考・える暮しこそ自分を肥やし育てる豊かな人生であると信じますが故に。

県の文学賞受賞者中に、日庸いの主婦あり、勤労者ありの事実
はこれを裏書しています。

発会当日、会員は五十二名ですが、どなたも希望者は入会出来ますので、遠慮なく左記事務所または各部会の委員さんへ申し込んで下さい。歓迎します。

会費は年六〇〇円です。十月に機関誌「矢吹文芸」を発刊する予定です。

不肖私会長に選ばれましたが、もとよりその器でないことは承知しています。設立世話人の一人として共に生きたい念願ですので、よろしく願います。

(鈴木 栄)

記

事務局

- (1) 体育館内 教育委員会
- (2) 東側七〇 幕田耕郎宅
部会委員

詩 小川琢士 菊地啓二

短歌 庄司きん 水戸守伊

俳句 会田キン 平山寿満子

川柳 熊田桜崖 塚本英二 小林 栄

俚謡 鈴木白風

評論 鈴木三巳 鎌田善治

小説 (井) 江戸沼俊願

絵画 熊田桜崖

〔昭42・8・3「公民館だより」抜粋〕

三九四「文学作品集」

〔俳句の部〕

秋深し草ぐさ土にかへりけり

会田 キン

紅梅の色のもどらず散りにけり

まなうらに亡夫の俤、春の風邪

阿部 きよ

万縁にこだま献謡石清水

とめどなき値上りの街日記買う

石井 奈加

焦燥の波たかぶれり冬の海

石井 洋音

はぜの実や重き葉影をぬけ出しぬ

上田 一子

るりやなぎ雨降りそそぐ小さき句碑

大沼 米子

われと吾が静かに春を待つ鏡

大島 富士

糸トンボ黒解きはぐす水の面

大沼 米子

母よりも祖母のかけ濃き餅を切る

大沼 米子

鳥声も絶えて雪積む一軒家

大沼 米子

遺雪嶺麦踏む顔の屈託なし

大沼 米子

こぼれ餌をあさる雀や日脚伸ぶ

大野 節子

はるかなる女に晩夏の糸ぐるま

大野 節子

囀やたちまち乾く硯海

大野 節子

杉揺るや軒の氷柱光りだす

木田 初枝

新涼や楽章のごと空晴れり

木田 初枝

寒明けや畳に光るこほれ針

佐藤 元枝

竹林に華やく雨の弥生かな

佐藤 元枝

枝豆をはじき返してもの言わず

鈴木 歌子

かげりなき空の青さや花芒

鈴木 歌子

寒木爪や指美しき舞一家

平山 寿満

人の妻となりても母を恋う霜夜

平山 寿満

春蘭に雲脚はやく閑の跡

山田 京

掌の窪に春の陽あつめ化粧水

川上 たみ

葉隠にて命永らへ寒椿

川上 たみ

天の忌や玩具広がり春うらら

矢吹 悦朗

真夜中のちゝろ虫鳴く詰所かな

矢吹 悦朗

榎の実を拾うあしたの爽かに

野木 忠房(杏 青)

人ゆきしあとも花菜に雨そそぐ

野木 忠房(杏 青)

木の芽雨ひと夜を夢にせゝらぎぬ

野木 忠房(杏 青)

〔短歌の部〕

春雷の遠くひびきて阿武隈の

有我 房子

山なみ見えず雲ひろこれり

有我 房子

木犀の花の香りのひときはを

有我 房子

強く入り来る雨止みし部屋に

有我 房子

露ながら賜ぶるなすびの親しもよ

伊藤 のぶ

摘み来し人の袖もぬれつつ

伊藤 のぶ

木ざわしは今日も泣きか親子鳥

伊藤 のぶ

さはしく返す雪もよふ日ぐれ

伊藤 のぶ

雨やみて水溜り光る朝の路

小川 喜一

疲れもち越し勤めに出づる

小川 喜一

バラの花水面に垂れて咲く夕べ

小川 喜一

産卵の鯉しきりに跳る

小川 喜一

鉄階段さしむ音する神秘なる

川村 茂子

あぶくま洞の声なき声の

おもおもと露をとどめし萩群の

花芽の雫は光を故つ

帰省せし子と晩酌をする夫の

饒舌になり量も過せし

指先に冷たく触れる青ぶどうの

透ききて祭近づくを知る

穂芒の穂のみ突き出て雪原は

色も匂ひも持たず続けり

或る日太く或る日は細き心なり

紛れもあらずわがものにして

それぞれの個性もつ顔逆様に

写しだせりピントガラスは

突きつめて物問ひかくる子の瞳

ひたすらにして云葉失ふ

蜘蛛の巣にかかれる梅の枯葉一つ

夕べの風に翻へりをり

川の面を吹きくる風に枯葦は

乾きし音をたてて揉み合ふ

天の川に沿ひつべダル踏み帰る

道の行く手を螢横切る

小針 徳子

庄司 きん

須藤 都志恵

高久 美智子

円谷 泰秋

身障の君美しく若々し

少女の頃の明るさ持ちて

音もなく降りつみし雪明けぬれば

陽はうらうらと蒼き冬空

雪掃きし巾のみの道りんと

身に迫りくる雪飛ばす風

届けたき吾が友の顔映りきて

朝露ふみてアスバラを摘む

木の葉積む大樹の下に春らんの

蕾ふくらみ春立つ林

未発表のドラマ秘めつつ今宵又

幾人どもの人幕を閉ずるか

袖引きてせがみし孫も今育ち

厨に独り山車の音を聞く

嵐にて荒れたる庭に佇めば

金木犀がほのかに匂ふ

陽だまりに嵐にいたむ柿をむく

絶えぬ車の音を聞きつつ

ひと日刈る稲を束ねむ藁浸す

みぞそばの紅葉照る沢に来て

葉の落ちて明るくなりしみづ木の下

円谷 操

円谷 よしの

戸倉 信子

根本 トミ

橋本 トク

杉の丸太の皮剥ぎてをり

黒雲の広がりゆけるその中に

一筋光る水彩の雲

記念樹に友に賜びたる八重桜

夕べの雨にひらき初めたり

いずこより迷い来たりし鈴虫よ

か細き声にてふた夜泣きつぐ

陽を追うて豆のむしろを移しめぬ

あきつの群の羽音聞きつつ

窓べより行く吾を呼ぶ声がする

青葉深ければその子は見えず

六月の疾風過ぎゆく朝廷に

露まみれにて蝸牛生る

こぶしの花上向き咲けりこの夏は

干ばつならむと老農は云ふ

緋の色にしどみの花の群咲きて

松房の野径夏ならむとす

そのかげを池に写して枯れ草に

しょうじょう袴の桃色匂ふ

石の辺に雪見灯籠の点りゐて

深雪の起き伏しあはくてらせり

樋山 常子

藤田 順子

幕田 てる子

水戸 守伊

水戸 米子

在りし日のままにアパートの一室を 宮本 正子

かざりて住めるその妻あわれ

早春賦唱ひつつベダル踏み行けば

やや荒き風歌うはひ過ぐ

道の辺に生れて踏れしはこべらは

踏まれても花の季には花持つ

稚なさの幾ばく残る娘らの掌が

月見だんごの練粉丸める

尺鉢の福寿草の花咲きつぎて

葉こもる梢みな蕾もつ

いかやうに疾風吹けども天辺の

月のごとくにありたき思ひ

手作りのまりと猫とにたわむるる

子なき老婆のしぐさ見て立つ

りんどうの紫匂いて亡き父の

山に倒れし想い出ふかし

〔里謡の部〕

命の限り自ら燃えて

夕日に映える山もみじ

あれやこれやの一日暮れて

酒と静かに夜を語る

横川 清(白水)

伊勢野 綾子

荒明 喜代亥(清英)

褪せた日記を繰る夜のわびし

亡夫の香がしむ筆の跡

梅雨の晴れ間を借んで握る

歟も重たい痛みあがり

基盤整備で旅行く鳥の

翼休める藪もない

瓢箪ぶらりとしている様で

苦勞でくびれた跡がある

那須の山脈ふところに抱き

山家染めてるあかね雲

つかれ果てたる浮世のひずみ

一人ゆれてるネオンの灯

銀杏ハラハラ両手に受けて

孫等豊かな金の簾

生れ変って来る日は遠い

この世浄土で暮したい

昔なつかし矢吹が原に

匂う野菊の乱れ咲き

芯が枯れてる苔むす松に

はぐれ鳥の只一羽

ほほをよせば真赤なバラの

小河 フク(福女)

あでな香に酔わされる

野中のバラのほのかなつぼみ

小雨にしっぽりぬれて咲く

矢吹好いとこ三代生きて

戦禍の外は苦を知らぬ

今日も一日花裁に暮れて

健康感謝の猪口に酔う

堀尾 義春(柳月)

佐久間 栄蔵

塩田 青子

〔川柳の部〕

開拓の記念樹門の松に苔

開拓の苦勞を松は話しかけ

ぼろぼろの家で歴史が光ってる

あの時の師の一言で今日があり

小屋の隅赤さびている三本鍼

北風のハゼびゅうびゅうと笛が鳴る

休ませてくれる病に感謝する

空高くラジオ体操雲を追う

踏み倒しあとは野となれ山となれ

好寄心人垣作る夜の店

公約は皆バラ色の明日ばかり

農民の手に豆が出来米が出来

断絶の言葉は知らぬ古炬燵

愛沢 晃(晃山)

荒明 喜代亥(清英)

泉田 好之(泉流)

市島 芳子(麗琴)

石川 武二

梅宮 利秋

遠藤 六兵衛(東甫)

仲西 キミ(涼子)

べしゃんこの日本興した土根性

老楽に拾った星はきれいすぎ

ふる里の香りを詰めた荷が届き

片思い恋の電波がはね返える

冷害の補助も農家は蚊の涙

初日の出弥栄の神に手を合せ

踏切へ事故なく願う我が一生

酔った客帰り仕度を何度もし

口惜しさは目なし達磨の捨てられる

野に出よと緑の風は呼びかける

日暮れて明ける神秘に我れ生きる

春の日を土手に呼んでる落の苔

晩酌を胸に老骨田圃這う

親孝行何のことやら子は育ち

終点の無い人生に夢を賭け

母思い流れるはての夏の雲

凶作を背負いどんぐり村を出る

農政の谷間に草の穂が伸びる

晩酌に座われば過去の音を聞き

背負い来た重荷おろせば七十路

朝まだき老楽の夢カッコ鳴く

小河 フク(福女)

鎌田 善治(元山人)

加藤 一二(一桜)

加藤 延(寸夢)

菅野 辰雄

木戸 竜二

熊田 隼人(桜崖)

小山 キヨノ(月子)

小林 栄(柿人)

小林 タケノ(竹乃)

味噌汁に松茸が住む過疎の村

疑いば妻も他人の票に見い

陽が落ちて風にさ迷う小糖雨

若人に打たれて生きる古太鼓

ひばり鳴く里転任のない暮

良心の骸ネオンの灯に踊る

壁掛けに和の字大きくもめている

茶話しの噂が村を駆けめぐり

長雨に散らすまいとて愛の傘

田植唄乙女の姿遠くなり

生き残り同じ話に花が咲き

眼帯がとれて開けた千里眼

母の碑にからみついてる母子草

口ずさむ名曲冴える庭の月

新庁舎町のくらしに灯をともし

田園の町を公害素通りし

よく食べる孫入賞の金メダル

花びらに若い思出触れて見る

僧房の梅雨のしじまに郭公鳴く

雪洞の灯影仄かに花匂う

初雪は童と仔犬摘み出し

鈴木 万次郎

鈴木 伊佐吉(天国)

鈴木 栄(白風)

鈴木 茂一(一風子)

須藤 セン(仙女)

白坂 栄(緑風)

塩田 青子

高久 満蔵(満州)

高和 キミ(貴美)

塚本 英二

富永 文吾

松並木芭蕉を呼んで月映える

人生を一筋に生きた背の丸さ

黒髪の誇りを時勢赤く染め

追羽根に袂がゆれた日は遠い

雑草の強さ生きるを教えられ

急ぐとも一声おとせ時鳥

どの家も女の声で夜は明ける

孫の来るたより盆栽場所を換え

名利の小石一つを記念とす

古い日の家並みも長い矢吹町

釣竿に来て一休む赤とんぼ

看板のきれいが泣いている汚職

たん声が車窓に洩れる眼下の美

初茸の香り変らぬ矢吹原

年金の付く世の幸へ旅の杖

赤錆びの鍬に先祖の汗にじむ

禪をしめて明治の誇りもち

人生を逆もどりのしたクラス会

モチベツト隣り知らずの餅が出来

生きたこと捨てた小草に教えられ

訪問着無理やり猫をかぶせられ

長尾 正直(麗峰)

仲西 キミ(涼子)

仁井田栄之助(栄坊)

根本 庄三(青風)

野内 勇(勇峰)

畠山 大二郎(清風)

堀尾 義春(柳月)

松川 文治(松風)

水戸 ミセ(松香)

水野谷 芳郎(櫻柳)

働ける幸一ぶくの茶のうまさ

足ることを知る寿の灯に和む

恙なく産声高し明けの星

幼なく児の夢次々に窓ひらく

六十の坂路重荷にや々と起き

仏壇のお供え孫の手が届く

〔詩の部〕

カーバイトランプ

夕焼けの色を忘れて久しいアパートの机に

ひとりの青年が坐ると

部屋の間が暗くなり

ひとりの少年が這い出してくる

さむしろのプロレスごっこで

相手の「まいった」は

塾の時間が近付いたためであることを見抜いた彼は

空手チョップを食らわし

カーバイトランプを提げて

夜の川に行く

水に自分のありかを知らせるのだが

水は魚を眼りに就かせるために

ランプの火を消そうとする

横川 清(柳禅)

吉島 タメ

吉田 安太郎(瑞晃)

阿部 正栄

いや それ以前に少年は
浅瀬の魚さえ突けなくて

石を突き

刃をこぼし

△あなたは慈悲深い人▽と

ぞっとする闇に

少年のままでいるしかない呪いがかけられたのだ

だからカーバイトランプは彼の夢の中で

彼が年齢を見失うように

燃えつつければいい

青年が

大きな寝返りをうてる

夕焼けの空で

〔昭52「輔」4号抜粋〕

六月のバラ

あんざいのりこ

今朝、庭のバラが咲いた

六月の豪華な香り

クインエリザベス

私の待つ人は闘ってばかりいるので

私はすぐ、花ばさみでパチンパチンと切りとっては、

部屋いっぱい飾り

レースのテーブルかけなど用意するのです

それさへ、彼には見えなくて

歌っているのはいつも闘いの歌

平和と平等と民主主義と

ああクインエリザベス

幾千年の歴史を生き

気位高く咲きほこり

とけないなぞのようにほえんでは

今年もいつてしまうけれど

闘いはいつか

今朝のあなたのそのほほえみのように

はなひらく日は来るのでしょうか

うすべに色の花びらが又私を

誘うけれど

もう花バサミなどは持たないのです

私の待つ人は、チョン切られた花など

きつと嫌いなのです

〔昭52 現代詩の会作品集「林」三号抜粋〕

車 窓

江田 恵美子

くぎられた振動の中で一冊の本が
窓へ私をおしだす

枯葉のかるやかな点滅

並んでいる活字

淡い部分から かけらをふきだし

陽気な譜が影を映す

スカーフやぼうしやリュックや

光につかまった群たちのかけ声

まじりあった透明な自由

みどり色に湧いたざわめき

鳶をまとい這いあがった

年数のむこうで

風船が舞う

走った車輪

朝も夜も詰めてしまった

止まった蝶のように一瞬

問いかけても

寒い言葉がすりよって

もったガラス鉢の重さを

ささえてしまう

すすぎが撫でる秋は

頬をとおる

濁れた田に坐る

眼のために 1

氷の刃よりも明るい

死の額に手をあてる。

その鏡の中に映っている

巨大な胃袋。

ひとしきり 誰かが

無神の階段をおりはじめる。

と、靴音は

空っぽな笑いのように

花やかに

天井から 一枚一枚

はがれて落ちる。

いまや 対眼レンズの其の方から

次第に起き上ってくる。

金属の獣物の幅広い胸の下で

どろだらけにふまれている

一片の自由。

〔昭53「の」22号抜粋〕

大滝 清雄

その周囲にえがかれた円周をめぐりながら

僕は

すりかえられた おのれの 義眼を

ふたたび

そっと 太陽の方に向けてみる。

〔昭和30 詩集「黒い水晶体」抜粋〕

さいかちと藤の木

小川 琢士

通り雨にぬれて

巨大のほら穴に入った

根元が朽ちてえぐられている

内部はすっかり腐蝕して

梢のあたりまで同じようながらんどろである

戊辰の戦に

手負いの落武者が

ここで夜を明かしたという古い言い伝えがよみがえる

明るいのやぶこうじのしげみに

血のついた葉があるように思う

雨あがりの滴の音にさそわれて

暗がりから出てきた

目を細めてふりあおぐと

さいかちの巨木が天をついている

その老木に一本の藤の木がからみついて

春 梢にわずかばかり紫の花房をつける

身をよじり まきついて伸びる習性を

藤は恥じたが

さいかちの力強さは論理の悲しみをかき消してしまう

枝別れのやつが仲間のよう伸びていて

たがいによじれ まきついて

梢の手前までせりあがっていた

秋

さいかちがわずかな紅葉をふりはらうと

こがらしが強くなり

さいかちの実が小鳥のようにさえずる

そんなとき

根元が風をのんでうめき身を立て

その声をきいて

藤は自分を支えているものにしがみつく

時おり生き残りのこうろぎが暗闇で鳴く

老木が鈍い音と共に崩れおちるのは

こがらしの吹く夜にそういない

数羽の小鳥が飛びたち

根元がゆれて

切り立つ岩場の古い灯台のように崩れさるだろう

立ち上る土煙

灰の山に変わる巨木のあとに姿をあらわすのは

よじれて立つ藤の木

中心から空が見え

夜は星がひかる

そんながらんどうを中心にもったとき

お前ははじめて自分の力で立つ

他の者に依存する習性

こんなかたちでひとりになるほかはない

季節がめぐり

暗がりでこうろぎが鳴いても

風が天のほうへ吹きはじめることはない

足もとをすべりぬけていく蛇を感じ

あたりを見まわすと

さいかちの巨木のむこうを稲妻がはしり

根元のやぶこうじのしげみが赤い実をつけて

雨にぬれたままである。

土 器

土をはると

土器が出てくる

ぼくは

土の中の手からうけとって

手のひらで

土器の体温を感じてみた

何千年も前から

ひからびた土に

しがみついていた百姓の

血管が

かわいたまま

はりついていた

その夜

ぼくは

草屋根を

深くかぶって横になった

〔昭52 詩集「黒」20号抜粋〕

菅野昌和

ぼくの胸の中では
山ばとが息ぐるしく

なっていた

ぼろきれをぶらさげた

桑畑

白く

死んだ

なたねや、麦の穂

ぼくは

土器のかけらに

無数にある

あのきずあとの中に

このぼくの

しるしを きざんでおく

五時の影

朝剃刃をあてた頬が

一日の勤めの終る午後五時には

うつすら青くかげってくる

それをアメリカの御婦人方は

〔詩誌「の」創刊号抜粋〕

菊地貞三

五時ファイブ・オ'clock・シャドウの影と呼ぶそりな

人差指一本ソフトのつばをつきあげれば

ビタリとすり寄ってくる車

ほどよく暗いクッションで

吸いさし煙草を窓から抛れば

お待ちかねの白い手がからみついてくる結構な

野郎共の頬の

Five o'clock shadow

冷たいビルとビルの間から

ちらりとのぞいた夕陽の玉

後悔めいたその赤さを舌先に転がしながら

背をまるめ

コートの際にアゴをかくして

せかせかに舗道を刻む手合いには

そんな色気はないというか

倉庫の影が地球を半分覆うように

おれのたましいの横ッ面に

延びかける髭

撫でまわす手ざわりのなかに

おれの八時間の死があつて

今日もまた機嫌は少々斜めである

じろじろ見るな！

忘却

〔昭34 詩集「五時の影」抜粋〕

菊地 啓 二

——忘却、それは大きいがあなただの中に在る。

しかし、あなたを取り除くと、あなたはそれの中に在る——

広さもなければ 深さもない。

私は 極みなき大きさそのものだ。

△時▽は あなたの使い古したものを

一つ一つ私の掌へかえしてゆく。

私は それらの反古の皺をのぼし

閉じた書物や 追憶の引出に蔵しておく。

降りつむ落葉のように

古いものから 順に新しいものへ。

しかし 下づみの朽葉は

あなたを育てる土壌にはならぬ。

ただ △時▽が水をそそぎ

私を 少し完全なものに近づける。

秋 あなたは 忘れるために本を読む。

つかのま心を温めながらも

椅子から立ち上るや

もう 私のいる方へ歩みよってくる。

そのとき私は あなたの傍へ

私の手製の椅子をさしむける。

言葉から 重い意味を休ませ

永遠から 暗い刹那をまどろませようとして。

秋すぎて 颪風が野面いっぱいに手を拡げる。

そうして さらに大きな空しさを掴むため

指の間から 取り落したものを

そっくり私にかえず。

私の掌のなかの 半壊の家屋。

その柱のうへの 傾いた時計。

あなたは 目覚めようとして

私の椅子から立ち上ろうとする。

しかしあなたは すぐさま気づいてしまう。

時計のうえの 曲った釘のような針には

気絶したままの 〆時〱が

ワイシャツのように引っかかっているのを。

分 婉

〔昭29 詩集「竜」I抜粋〕

木目沢 昭夫

後肢で はげしく腹をけった

背が曲る

尾が ホルスタイン牝の成長曲線を描く

はりつめた弦のように尾房は さかだつ

赤くあまりに大きい乳房

―子供に童話の本を買ってやれる……

妻の顔は青く小さい

牛がうなっているのに

寂しかったのに

「まだまだ」と言う

粉雪の中に妻は消える

牛の尾が悲愴な音を立てると牛舎は賑わった

牛は人間の意のままに苦しむ

人間に怒る

人間に反抗する

赤黒い空気 牛舎温度八度

粉雪は空虚に降る

牛のうめきに手の中に小さな肢は伸びる

紫の舌がぬらりと暖い

泥血の中に仔牛は動く

かけこんだ妻の顔が赤くふくらむ

この数百分の戦は誰の為なのか

粉雪を仔牛はぬらぬら吸い込む

買 う

〔昭43「の」16号抜粋〕
小 針 茂

親父が

親母が

小さな田畑にはいつくばって

くりかえし くりかえし

ほじくるたびに

俺は大きくなった

俺は大きくなるにつれ

田んぼから畑から目をそらした

親父と

親母と

違う方向に歩きはじめた

俺は

親父が

親母が

はいつくばって

ほじくり つづけてきた

田んぼや畑をうめはじめて

七年経っていた

親父が

親母が

これでもか これでもかと

ほじくりかえした田んぼや畑から

とれたものと同じものを

俺は買うことを覚え

もうひきかえせないことを知った

〔昭53 現代詩の会作品集「林」九号抜粋〕

このごろ

丹内由直

このごろ昔みたいな夕焼けが見られなくなった

夕暮れは 車のライトと街の灯だけ

もう冬だというのに

秋の香りがする空が多いのは

初冠雪の山頂からころげ落ちて

冬が痛んだからと思いませんか？

浮かんではまた 消える雲のように

気温の変化にはんろうされても

何も変わらぬものはありはしないから

自然の息吹に抵抗することはない

それにしても……

このごろ昔みたいな夕焼けがないと思いませんか？

〔昭52 現代詩の会作品集「林」六号抜粋〕

鬼 火

中 潟 寿美子

雨の夜は鬼火になりたい。

遠くには洗面とみられる笑いに顔を歪ませて

ひくひく家々の屋根をかけて歩きたい。

おびえながら愛した日々を

つまんで捨てゝ歩きたい。

夜空の下にはいつだって呪いがあるのだ。

決して許せない多くのものが

風化した家々のせまい窓

自然石のような煙出しにうまくかくれているのだ。

私が鬼火になったら似合うだろうか。

目玉はどこに

型は球でよいか

それともボロ屑のようにさくれだったものがよいか。

憎しみのあまりちぎれやしないか。

私は不安に息づまってしまう。

用心深く窓をあけると

うなだれうなだれて続く雨の行列。

絶え絶えに光って

ことごと水たまりに落ちていく雨の粒々。

ぼつぼつ私は燃えおちるだろう。

沼

ある夏の日

おれは見えていた

〔昭31 詩集「鬼火」抜粋〕

長尾直幸

その沼が

あたりいっぱい夕映えを

呑み込んでゆくのを

黒いかたまりとなって

飛んでいった鳥たちは

その日からは戻ってこようとしなかった

短い夕風ぎの間に

沼の生きものは

今日の眼りにつく

夜霧が沈んでゆく

その中で

月見草が白痴の笑いを

浮かべている

地と天の　ごっちゃになるあたりには

今日も

朱に塗られた月が

ひっかかっている

夕映えを腹いっぱいくった

沼は

ふりむこうともしなかった

〔昭42〕の「抜粋」

子リス

福尾 美智子

黒に赤の

四角い牛のように大きいカバンをしょって

学校に急ぐ

すべり台で ゴリゴリ

土に砂に ゴリゴリ

膝とお尻に摩擦の焼け跡を残すと

あぜ道に花を摘み

林の中を

おもいっきり飛んで

そして

歌いながら帰れたらいい……と

子リス達は一本の太く

透明な紐を

今日も強く結びながら夕焼けに戻る

焼け跡からは

小さい膝小僧が

ときどき クラクションの音に

しわよせながら

チラチラ 生活の顔を覗かせて

風 鐸

星 圭之助

〔昭52 現代詩の会作品集「林」三号抜粋〕

くらい落水のあたりいまだ星の気配もない

地平からことばの発芽を待つのもない

ねむれない眠りをねむるまぼろしの鳥舟の

へさきにとまる鳥たちはあらぬ方ばかり向いている

夢はにぶいぬくみをおびて寝がえる

きしりながら錠前がはずれると

そこから夢枕に立った魂・鎮めのわびしい行列が影を曳いてゆく

あれはわたしたちの遠い影だ―

やがて その行列はしわよる谷あい深く落ちた

いまこみあげてくる霧の背後にさえ曳くものをまたない

のこされた儀式にさえも意味を込めることもない

掘りつかえし掘りかえすくすぶる・黄瀬戸の水底にゆらぐもの

その貧乏徳利のなかにかすかな声がきこえるか

ゆきつくところ村人たちは累の

滋養に煮こごる墓穴を掘る

掘りつかえし掘りかえす婆は骨を拾い集め

娘は夜して芋粥を煮る

わずかな粥で足した娘の腹の縫れた生毛のあいだから

臍の緒をかいま見る

すすぶる板戸のすきま風ふさぎに一揆・訴願文書など貼っている
と

庭にさんしょう喰いがきてしきりに臍をついばむ

鳥たちの血ばしった眼に映る野原は羽ばたきで傷つき

荏胡麻の匂いにみちてくる

呪縛された野蠻な時間からのがれてゆく彼方

琥珀色の酒にうましたゆらぎのなかに

まぼろしと浮んだ塔のへさき

白鳳仙の耳朶のようにながく垂れて錆色を濃くする

〔昭53「の」22号粹粋〕

[小説の部]

春の子守唄

幕田耕郎

ていは八才になった。

今日は山一つ越えた向うの村の大きな家にもらわれて行くのである。
ある。

三箇月はかり前、その資産家の家に赤ん坊が生れた時、ていの

父親との間に、にわかにそういう話になった。

ていが生家を出るための支度として、養家先から、真新しい、赤いカスリの四つ身の木綿の衣裳が一枚届けられたのは、昨夜のことである。

それを着て、三里半の峠を越えて行く。

ていは新しい衣裳を着ることができたのが単純に嬉しかった。見送ってくれた兄達が妙にそわそわしていたのや、母親が小さなおにぎりをつつだけ作るのに、そつと涙をこぼしたことなどに全然気がつかなかった。

たと着物の裾や袖を小藪や小枝の先にひっかけて、破ったりしないように、それだけ考えて一心に道を登った。

ていの生家は峠の北側にある。道筋の日陰などにはまだ少しうす汚れた雪が残っているのだが、やがて頂上に着くと、不意にあたたかい南側が展けた。

生ぬるい風が汗をかいた肌のところよく泌みる。ていがこれから降りていくという村は、遠くが蒼い湖のように霞んでいて、里には桃の花と桜の花が咲いていた。家々の白壁が光り、赤い尾根瓦がのんびりと日光を吸っている。

薬屋根の、土間と寝間だけしかない小さな家に、十二人もの家族で暮らしていたていの目には、たまげような広くて明るい世界であった。

「里の家というものは何と楽しそうなのだろう」

ていは、ここでも単純にそう思った。里の花や若木の匂いが山の傾斜を伝って、ていの足許まで上ってきそうな気がする。ていの胸の裡には末だ別離の情が湧いてきていない。珍しように、好奇心の強い面持で下界を見ているのである。

峠の上の石に並んで腰を下して、ていは母親からおにぎりをもらった。焼きみその香りのぶんと鼻につくその小さな飯を、両手でいとしそうに囲って、ていは少しずつ食べる。

母親は自分の分を持ってきていないので、黙って娘の食べる様子を眺めているのだ。

昨夜ていの衣裳を持ってきた使い人が、いくばくかの金をこの母親の手に渡したのである。その同じ手が、今、娘がうまさうに食べているおにぎりを作った。

母親はていから目を離すと、ぼんやり里の方を見下した。はるか遠く、畳を敷きつめたような平地の一隅を陣取って、ていの行く屋敷が見える。真っ白く無数の綿菓子束ねて浮かせたように棟の間に咲いているのはもくれんなのだろう。できるなら、あんな家にかわいい末っ子をやりたくはない……。

しかし、母親はていの方に向き直ると、それとは反対のことを言った。

「おてい、しっかりと奉公せにゃあいかんど。決して家に戻って

きてはなんねえ」

「うん」

ていは食べ終って、いきいきとした瞳を母親の方にうなずき返した。そして急に声を張り上げると歌いだした。これも、昨夜、姉達からいっしょうけんめい習った歌なのである。

守子なして泣く 家恋ひさかる

背のわらし子 泣きさかる

家さ居たとて 何楽しから

栗のまんまや 稗ばかり

ぼんが来たとて 帰れぬ守子

峠ながめて 子をゆする

ていはまだ、自分が子守として売られて行くのだとは知らない。ただ、無心な歌だけが春の澄んだ大気の中を通った。

〔昭48「矢吹文芸第7号」抜粋〕

(2) 文化活動

三九五〔昭和三年矢吹美術協会結成〕

矢吹美術協結成

矢吹美術協会結成は八月五日午後七時半より同町鈴木昭松氏宅

において開催するが、同好者、初心者も歓迎している。

矢吹美協誕生

矢吹美術協会は同好の志十三名参集、九月の祭典を期して美術展覧会を開催する事に決定し、なお同会の役員は次の諸氏である。

▼会長熊田ハヤ人▼副同高桑虎治▼幹部横川清

〔昭23・8・1「やぶきタイムス」抜粋〕

三九六〔昭和二十三年矢吹町明朗クラブ〕

陣容強化

明朗倶楽部

矢吹町明朗クラブは、この程役員の改選を行い、町の文化発展に尽力することになったが役員は次の諸氏である。

体育部長兼野球班長谷川正二 文化部長兼拳闘班長屋形勉 文芸卓球班長野木朝男 陸上班長佐久間博 水泳班長上田晴一 政経班長仲西一 渉外班長藤田勲 少年班長仲西友之 音楽班長黒川芳雄

〔昭23・8・1「やぶきタイムス」抜粋〕

三九七〔昭和二十三年オリンピック协会会员募集〕

会員募集

オリンピック会では文化の向上を目指し今般内容の刷新を図り社交ダンスの外にレコードコンサート、討論会、読書会、各講座等に主眼を置いて邁進致すことになりました。同本会主旨に御賛同せる諸兄姉（成年男女）の御参加を希望致して居ります。

昭和二十三年十二月十九日

オリンピック会

幹事長 沢 田 陽 一

〔昭23・12・19「やぶきタイムス」抜粋〕

三九八〔昭和二十三年県南素人ノド自慢大会〕

県南素人ノド自慢大会

旧節句に贈る豪華版 矢吹富永会館で開催

初夏の訪れと共に農繁期の一ときを楽しいメロディーに明日の増産の糧を養う本社が贈る県南素人ノド自慢大会を阿武隈時報矢吹支局東北毎日新聞矢吹支局共催文化協会後援で、来る六月十二日（土曜）旧節句に午前十時より矢吹富永会館で開催するが、今回のノド自慢大会には郡山放送局の応援を求め、放送局より審査員が来矢、特に入選優秀者には県内放送出場の特典が興えられる予定で、出演希望者は六月五日まで（以後は受付ません）に本社又は阿武隈時報矢吹支局宛、テスト料二十円を添え、題名住所、氏名、性別を明記の上申込む事、詳細は追って紙上に発表する。

〔昭23・5・9「やぶきタイムス」抜粋〕

三九九〔昭和二八年矢吹町映画館建設請願〕

請願書

終戦当時の所謂去脱状態の中から文化国家を目途として再建を期して以来既に八年の星霜を閲して参りました。其の間冷戦に或は朝鮮事変に左右されていたとは云い文化生活の伸長も、又見るべきものがあり殊に映画は新聞雑誌等と共に近代生活の一要素となつて来たことは周知の通りであります。

此の映画観賞の施設に關しては近接市町村は何れも優秀な設備を擁しその需要を満して居ります。然るに我々が矢吹町は近接村の文化の中心であるべきにも拘らず未だに映画館の設備もなく一般地方観賞人を吸収し得ざるのみかむしろ白河須賀川郡山等に当町からさへも吸収されて延いては町商工業不振の大きな原因となつて居ることは、又衆人の認めて居る所であります。

此の事実に鑑みまして、わが木曜会は映画館の建設こそ当町に於ける目下の必緊事と認めこれが実施方を決議し努力致して居ります。これが為には、又相当の資材を必要とするものであります。が、当町には旧飛行場に格納庫の一部払下げを受けたるまゝ風雨に放置してあり徒に腐敗破損にゆだねられ町民批判の対称になつて居りますが、これが映画館建設の目的に使用することが出来

ば幸に過ぐるものなしと存する次第であります。茲にこれらの現場に省みて映画館建設のために、この建造物を出来得れば無償払下げ相成度此の段請願するものであります。

昭和二十八年八月五日

矢吹木曜会映画館建設期成同盟

会長 大木 宏 男印
副会長 門谷 昌 幸印
同 熊田 俊 一印

以下(署名略)

〔町有 昭28「矢吹町会議録」抜粋〕

四〇〇〔昭和三〇年映画常設館新設計画〕

映画常設館も新設

明年五月、花々しく開館

矢吹町の映画常設館設立運動は同町大木代吉氏が設立準備委員長となり、商工業者が一丸となつて資金の蓄積に拍車をかけている。設立資金は三百万円だが、株主加入者は日掛、月掛により株の引受けを申出ており明年五月には斬新的な設計による常設映画館が矢吹町の目抜き通りに誕生することになっている。この常設映画館の設立によつて矢吹町は見違ひるばかりに活気を呈すものと思われ、その実現の日が待たれている。また白河酒造KK大木

工場のボーラーを利用しての共同浴場も同町木曜会により計画されている。

〔昭30・3・31「矢吹タイムス」抜粋〕

四〇一〔昭和四十六年県受賞者〕

県受賞者の素顔

—わが町の誇りと榮譽—

十一月三日の文化の日、県文化センターで開かれる県文化功勞者同文学賞、同体育功勞者の表彰式は矢吹勢で独占した形で、「文化とスポーツの町」をスローガンにかかげるわが町の宿願は見事に花をひらいた。

まず、文化功勞の長尾重延氏は当町で薬局を経営している長尾豊久氏の叔父。永年の薬用植物の研究とその分布図の発刊など薬草知識の普及に努めた功勞により晴れの受賞となった。

県文学賞小説の部では加藤たけし君が初登場で栄冠を獲得した。「ぼくにはさっぱりわからない」がその受賞作。中央でも立派に通る筆力とは審査員の評。

同詩の部で準賞に選ばれた教委会職員星圭之助君は四十二年度の奨励賞に引き続き二度目の受賞。鋭い感覚から生み出される格調高い詩はすぐれた才能の所産として大成が期待されている。

体育功勞賞には仲西昌寛、溝井力男両隊員をふくめたヒマラレ

遠征隊が選ばれた。アフガニスタン王国のコ・エ・パンダカー峰の登頂に成功した功勞によるものである。

このかがやかしい受賞を一万六千町民の喜びとし、今後ますます「文化とスポーツの町」の実績と名声を全県下に広めようではありませんか。

〔昭46・10・20「広報やぶき」抜粋〕

四〇二〔昭和五十二年矢吹町文化会議結成〕

本町における唯一の総合的な文化団体として、「矢吹町文化会議」が生まれました。この日は昭和五十二年五月二十八日、地域の文化向上をはかるため、広い立場から、考え、話し合い、行動するという第一歩を踏み出したわけです。参加した諸団体、グループは以上のとおり。

矢吹ペンクラブ（文芸）

矢吹短歌会（文芸）

地区労働協議会（一般）

中畑柳扇会（舞踊）

梓会（詩吟）

宝雲会（謡曲）

まつかさ川柳会（文芸）

矢吹緑松会（謡曲）

矢 吹 宮 城 会 (琴) (福島正紋社矢吹支部)

教職員組合西白支部矢吹地区 (一般)

三 神 婦 人 会 (一般)

春 蘭 民 謡 会 (芸能)

三 味 線 ク ラ ブ (芸能)

香 蘭 会 (舞踊)

み どり 盆 裁 会 (生活芸術)

小 物 盆 裁 会 (生活芸術)

郷 土 史 研 究 会 (歴史)

た つ 吉 会 (舞踊)

この十八団体約一千名の方々に加入していただいております。

他に個人参加として四十九名の方が登録されております。一本の矢は折れるが三本の矢をまとめると決して折れないという故事にもあるとおり、矢吹町文化会議もその構成団体が多ければ多い程、幹が太くなりしっかりした活動ができます。地域に皆の生活と直結する文化をつくりましょう。文化会議のことをまだ知らない方、まだ入っていない方は、これからでもどんどん参加して下さい。個人でも団体でもOKです。文化ということには大切なことが三つあります。

一、文化遺産の伝承と保存 (たとえば三城目の平鋤踊り^(郷)のようなもの)

二、文化の創造

三、文化の普及

いずれにしても大切なことは、文化が米やパンと同じように人間の生活の必需品であり、それが生活に活力や恵沢を与えるものでなければならぬということです。

矢吹町文化会議は一時的な話し合いの場ではありません。地域文化の総合的な発展に有志の力を寄与しようと恒久的に構想されたものです。参加団体と横の連絡を十分にとりながら、個々の力ではできない大きな文化活動をやらうというものです。

今年度は次のような事業計画をしております。

一、町民文化祭各部門への積極参加、共催

二、町民に密着した講演会、又は音楽会の開催

三、伝統文化遺産の保存と紹介

どれをやるにしても、町の皆さんの理解と協力なしにできるものはありません。よろしく御支援をお願い申し上げます。はこのことであります。

以上、矢吹町文化会議のあらましについて御紹介させていただきましたが、ひとつ皆で温い目で見守り、これを他人ごととせず、町文化向上に確実な役割を果させようではありませんか。

矢吹町文化会議の役員は次のとおりです。

会 長 鈴木伊祐

副会長 高久満蔵、川上喜恵子
事務局長 淵田勝

事務局 鈴木利衛、郡司悦子

監査 石川孝一、大森保子、大場昭雄

幹事 菊田善四郎、安斎正夫、藤田正雄、服部ひろみ、栗

崎千代松、渡辺一知、井戸沼俊顕、藤井義雄、小泉

繁男、および参加団体よりの幹事。

〔昭52・8・1「広報やぶき」抜粋〕

四〇三「矢吹町文化団体」

種別	団体の名称	会員数
総俳句合	矢吹町文化会	二〇〇人
俳句	矢吹俳句会	二〇〇人
短歌	矢吹短歌会	二〇〇人
詩	「の」同人会	二〇〇人
川柳	現代詩人会	二〇〇人
文芸	弥栄川柳研究会	二〇〇人
民謡	矢吹町ペンクラブ	二〇〇人
舞踊	春蘭民謡会	二〇〇人

詩歌	三味線	箏曲	器楽鑑賞	合奏	盆絵	人形	読書	児童	無線	電線	歴史	民俗芸能保存会	囲碁	将棋
柳小	た	宝	緑	梓	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町	職	員	器	楽	愛
た	宝	緑	松	あ	福	若	矢	吹	町</					

華

道

矢吹町諸流華道教授連合会

合

〔昭53 矢吹町社会教育関係団体調査より〕

四〇四〔昭和三十一年矢吹町文化財保護条例設定〕

議案四十二号

文化財保護条例設定の件

右条例別紙の通り設定するものとする

昭和三十一年六月十六日提出

矢吹町長 野 木 忠 房

第一 条 この条例は文化保護法並に福島県文化財保護条例で

指定した文化財を除き矢吹町に所在する文化財を保存しかつその活用を図りもつて町民の文化的向上に資すると共にその進歩に貢献するを目的とする

第二 条 この条例で文化財とは左にかかげるものをいう

1 芸術上価値の高いもの及び考古資料

2 価値のある史跡名勝及び天然物（以下有形文化財という）

3 無形の文化酌所産で歴史的芸術的に価値の高いもの

第三 条 矢吹町「以下教委と言う」教委は町内の有形無形の

重要文化財の所在について指定することが出来る

第四 条 教委は重要文化財が町内に所在しなくなった時、又はその価値が失ったときその他特殊の事由があるときはこれを解除することが出来る

第五 条 第三条の規定による指定又は前条が解除をしたときは教委はその旨を所有者に通知しなければならない

第六 条 この規定により指定された所有者は教委の指定及勧告に従い管理しなければならない

第七 条 重要文化財の所有者が変更した時は速にその旨を教委に届け出ねばならない

第八 条 重要文化財が滅失し又はき損した時はその旨を速やかに教委に届け出ねばならない

第九 条 重要文化財の管理又は修理については所有者がその負担にない場合は教委はその修理費の一部を予算の許す範囲内に於て補助する事が出来る

第十 条 補助金を交付する場合は教委はその条件として管理又は修理について必要な事項を指示する事ができる

第十一 条 教委は重要文化財の所有者に対し教委の行う公開に共する為の出品又は公開を勧告する事が出来る

第十二 条 教委は第三条及第四条についてその調査に当り教委

が任命したものを立入り調査を行はせることが出来る

第十三条 無形文化財のうち特に価値の高い保護を要するもの

については資材のあつせんその他適当な助成の措置を講ずることが出来る

第十四条 その他この条例の施行に関し必要な事項は別に細則

で定める

付則 この条例は公布の日から施行する。

〔町有 昭31「矢吹町会議録」抜粋〕

四〇五〔昭和四六年中畑陣屋二本力ヤ県指定天然記念物に〕

中畑陣屋の二本榎

初の県指定天然記念物

県教委は十一日定例会で、県指定の重要文化財、同史跡、天然記念物を決めたが、その中には町内ではじめて県指定天然記念物になった「中畑陣屋の二本榎が含まれている」。

県指定天然記念物「中畑陣屋の二本榎」は、中畑字本村にある岡崎憲太郎さんの所有で天保八年（一八三七）年にこの地方の領主だった旗本松平軍次郎の陣屋跡、当時すでに見事に成長していたと記録に残っている。南の榎、根のまわり約六米、高さ十八米、北の榎、根まわり約五米、高さ十八米、樹勢は良好で毎年たくさんの榎の実をつける。榎の木を正面に旧中畑陣屋が建ってい

る。四月十四日に県指定となった。

〔昭46・4・20「広報やぶき」抜粋〕

四〇六〔昭和四七年四月鬼穴古墳群県指定史跡〕

県指定史跡に『鬼穴古墳群』

四群からなる貴重な古墳

県教委は三日の定例会で県指定文化財を決めたが、その中には、県指定史跡「鬼穴古墳群」が含まれている。

県指定史跡「鬼穴古墳群」は神田字神田東三十一番にある。合資会社真興機械製作所代表社員小島時彦さん（本社、名古屋市中区、藤井義一さん（神田字神田西五十五番地）、鈴木徳之さん（神田字神田西八十五番地）の所有で一号墳と二号、三号、四号墳を数えることができる。

一号墳は半径約二十六メートル高さ、四・一メートルの円墳、横穴式の石室を持ち、しかも県内では数少ない両袖式石室が比較的に残っている。

こんどの指定を受けた文化財史跡は、これまで県文化財専門委員会選定されたものばかり。

これで矢吹町は「中畑陣屋の二本榎」と今回の「鬼穴古墳群」の二件が県指定天然記念物、史跡に指定された。

「鬼穴古墳」については矢吹町文化財調査報告書「谷中古墳」

にくわしく載っています。実費で頒布しています。

〔昭47・4「広報やぶき」抜粋〕

四〇七〔昭和四八年国神城跡町指定文化財跡〕

―町指定文化財史跡の第一号に指定―

県営は場整備事業と泉川河川改修工事で破壊寸前となっていた中畑地区の「国神城跡」がこのほど町史跡として指定し、本格的に保存することを決定しました。

国神城跡は扇状地に張り出した舌状台地を利用して作られた鎌倉、室町時代の代表的な館跡であり、周囲には多くの遺跡や埋蔵品も考えられ、町文化財の中では最も貴重な遺跡になっています。

ところがは場整備事業と泉川改修事業のため今春には破壊される運命になっていました。

しかし教育委員会では地区住民に協力を呼びかけると同時に工事の変更を訴えるなど保存運動を進め、二月三日には町文化財専門委員会を、三月二十二日には町教育委員会を開いた結果、矢吹町指定文化財第一号として、指定史跡に指定することを決定、四月一日付で指定しました。

この間、県営は場整備事業矢吹地区事業の関係者はじめ、仲西町長（矢吹土地改良区理事長）、岩谷助役、小林教育長も出席さ

れた中で話し合いを重ね、また原宿地区の方々とも泉川沿岸遺跡の調査主任である永山倉造氏をまじえて、数回の話し合いを行っています。とくに正福寺住職の星祐聖氏（町教育委員）、土地所有者（代表）岡崎長成氏、原宿区長高久満定氏にはお骨折りをいただきました。

〔昭48・5「広報やぶき」抜粋〕

四〇八〔昭和五〇年三城目獅子舞・平鍬踊り町無形文化財指定〕

三城目獅子舞・平鍬踊りが

町の指定無形文化財に

四月十一日、矢吹町教育委員会は、文化財専門委員会において審議された「三城目獅子舞、平鍬踊り」の町指定無形文化財の指定を正式に決定しました。

この「獅子舞、平鍬踊り」については、三城目の地域住民はもちろん、広く町民の知るところであります。その由来は、宝暦年間ころ、景政寺住職祐和和尚が、獅子舞を編成して村人に教え後世に伝えさせたものといわれ、十歳前後の男の子が三人、腹部に結いつけた小太鼓を叩きながら横笛と歌に合せて踊るものであるが、二匹の雄獅子が一匹の雌獅子を中にはさんで楽しく遊び戯れる、のどかな姿を舞に仕組んだもののようである。

平鍬踊りは、遠く中世のはじめ、農民が領主鎌倉権五郎景政の

戦勝を祝福し、^(旋)凱族を歓迎して踊ったのがそもその起源と伝え

られています。往時は領内の各処で盛んに踊られたが、現在ではほとんど保存されてなく県内でも貴重な民俗芸能のひとつになっています。その様子は元氣な若ものが、思い／＼の花を背負い、

笠鉦を中心に、農民にとって大切な鍬を叩きながら横笛の音に合わせて踊ります。それは農民達が歓喜雀躍して領主の凱旋を迎えた姿を彷彿とさせてくれます。

獅子舞も、平鍬踊りも旧暦の九月十九日、豊作に恵まれて、農民の経済がゆたかな間に奉納されてきました。村内の社寺の外十ヶ所で舞を奉納、祭礼当日には、朝から晩まで村をあげて行われたようです。

〔昭50・5「広報やぶき」抜粋〕

四〇九〔昭和四十七年郷土史研究会の結成〕

郷土史研究会の結成

庶民の生活文化を掘り起そう

鈴木 三 巳

三神小学校創立百周年記念事業として、学校沿革誌が編集され、編集にあたられた委員の方々の刻明な努力が非常に好評を頂き特色のある沿革誌として後世に残るものであったことは極めて

意味の深いものであった。

実行委員会が解散される時、どうかして沿革誌編集は継続したいものであり、ぜひ実現すべきものではないかとの要望が委員全体の声であった。

私はせっかくの仕事を学校教育面ばかりでなく、経済政治といった分野まで拡げ、郷土の歴史をもっと掘り下げたなかでまとめあげたいと考えていた。

この仕事は、三神地区といったせまい範囲でなく、町全域で調査され、各地域の特殊性が浮彫されることがたいせつであるように思う。

結論として沿革誌編集は町全体の問題として進めるよう運動を盛りあげるということであった。

それには権威を持ち、深い趣味を持つ方々の参加を得たなかで進めることが大切であるので今日になってしまったのである。

幸い教育委員会、文化財保護委員のはげましや日常生活のなかで折にふれての話題として、部落の歴史を探りあげた場合年代を超えた共通な感情のなかに、郷土の歴史を殆んどの人達が考えていることは力強いものと思っている。

だが、考えてのみ日を送ることは開発の急テンポの現在では取り返しのつかないこともあわせ考える必要があると思う。

ここで勇気を揮って矢吹町郷土史研究会の結成に踏み切ったわ

けである。

趣旨は

郷土の歴史をいろいろな角度から又は形で、芸能民謡、民俗信仰、社寺、古墳、遺跡、出土品、古文書、地名、自然木など、祖先の生活の跡を物語ることにについて保存的な立場で、現在の生活と比較する生きた文化史を素朴ながらも、考え究め集録することが必要であり町の発展につながる道でもあると考える。

事業としては、史談会の開催、資料の交換、研究集録の発行など夢でなく現実的な形として具体化したいと考えている。

自主的な団体であるので誰れでも参加出来る同好の方の集りと、性格つけたいものである。

秋深くして夜空にオリオン座の星きらめき自然の悠久さを切に想うとき、草深く貧しき生活に耐え創りあげた庶民の生活文化を究める所義を切に思うのである。

〔昭47・12「広報やぶき」抜粋〕

矢吹町郷土研究会が発足

さる一月十日、商工会館で発会式を行ない、会員申し込み六十五名、出席五十名の盛会だった。

小林栄さんが司会に指名され、規約の審議、役員の選考等、活発な意見がかわされ、会長に鈴木三巳さん、副会長高久満蔵さんが選ばれ、その他委員、事務会計等それぞれ推薦され、つづいて

会員の研究発表に移った。まづ鈴木栄氏の「ふるさとの唄」について「盆唄」・「わらべ唄」・「祝唄」・「都々逸」など若いころ採集した古手帳から四、五十ほどプリントした興味のある発表があった。私達の先祖が創造した素朴な感情の表現は情緒豊かな農民の詩でもある。

私達の先祖はこの地でどんな暮しをしていたか唄を通して探知したい。中にはお役人に対して反抗した唄や皮肉もあり、おじいちゃんやおばあちゃんに思い出して頂きたいものである。

次に井戸沼俊顕さんの研究深い「地名考」は造詣深く、毎月の館報に見るように、お江戸の真ん中にある神田は矢吹にも関連性のある興味深い発表に時のたつのも忘れさせた。また矢吹中の藤田正雄先生の新しい歴史観に立った郷土史の考え方について、与えられた歴史観を捨て、自分の目で見、自分の手で捉え身近な祖先の歩んだ道を探り、社会構造、思想、生活のあらゆる形象を浮彫りにしてその母体を明らかにすべきだと、現代史観に立った感銘のふかいものだった。

最後に星圭之助さんの発表に中畑大師堂遺跡の壬申（十二支）文字の土器は仁寿二年（西暦八五二年）のものと考えられ、東北地方の土師編纂研究の基礎資料として貴重なものと須賀川市立博物館の永山先生も話している。

その他民俗学の立場においても調査したいものがたくさんあ

る。例えば部落の年中行事を初め冠婚葬祭の地域別の風習や昔しのドンド焼き、ムジナブチ、などこれら身近かなもののなから郷土の歴史を解明し、そして未来に創造の眼を向けて行きたい。

〔郷土史研究会〕

〔昭48・3「広報やぶき」抜粋〕

(3) 地域広報紙

四一〇〔昭和二十三年「やぶきタイムス」創刊〕

やぶきタイムス（のち「矢吹タイムス」と改題）

発行所 やぶきタイムス社

編集発行兼印刷人 佐藤文夫 のち近藤正三、森証次郎となる

発行 月四回毎日曜日発行

有料配布

創刊 昭和二十三年四月十一日

昭和四十七年十二月八日第八九三号をもって

廃刊した。

〔町史編集室調〕

四一一〔昭和二十九年「教育やぶき」創刊〕

仮称「やぶき」の発刊

子供の教育は学校にまかせるといった様な考え方は昔の教育で

あって、先生は勿論父兄も社会も一つ心になって子供の教育にあたるということが、新しい教育でありまたそうでなければならいと存じます。PTA活動が盛んになって来たのもその為であって、その活動の目標は皆で教育の勉強をし教養を高めて子供の教育の為に先生は直接活動し父兄はこれに協力するという事です。小学校に於ける芽生、中学校に於けるPTA会報は、この目的を達成するために発刊されて来たものであります。

本年度発刊を計画されていた公民館報は公民館の機関紙であって、公民館が社会教育の中心機関である以上社会教育を目標として編集されなければなりません。従って、芽生も、PTA会報も、公民館報も教育という面では同一目標の上に立つものであります。只違ふとすれば其内容であって、学校教育では児童生徒を対照としての勉強即ち子供のしつけをどうすべきか、子供のしつけの為に家庭ではどうあるべきか、といった様な点を勉強することが主眼で、社会教育では公民として身につけねばならぬこと社会生活をするためにお互い守るべき心掛等主として社会人としての教養を高めて行くことが目的でありますから、標題や記事もそれぞれそれにふさわしいものになって行きます。然しこの二つは広い意味での教育という面から決して差のある筈はありません。その上、学校の方で刊行物を読んで貰う父兄というのは町民の方々であり、公民館報を読んで貰う町民の方は総て父兄であり

父兄となる人達であります。目標に於て一致し、読んで貰う方々が同一である芽生とPTA会報と館報とが、小さな力でそれぞれ刊行されて居るよりも一つになって強力な力で町の教育に当ることとは大いに意義のあることと存じます。以上の様な理由で小学校の芽生と中学校のPTA会報と公民館報とが合同して「やぶき」という刊行物となって町民の皆様の前に出されることになったのであります。

ことにこの「やぶき」は全戸漏れなく配布する予定であります。御家族皆さんに揃って読んでいただけたらこんなうれしいことはございません。

ただ、この「やぶき」が今後健全に発達するかどうかということとは編集にあたられる方々の努力と、これを読んで下さる町民の方々のご協力とによるものであります。この際ぜひお願申し上げたいことは、出来たものに対して、良し悪しのご批評はご遠慮いただいて、どう改めればもっとよいものになるか、どの点が良いかという御意見、御注意を頂戴いたしまして、矢吹町の発展のため、矢吹町の町づくりのための礎となるようお力ぞえをいただきたいということです。

〔昭29・7・20「やぶき」のち「教育やぶき」創刊号抜粋〕

教育やぶき 無料全戸配布

発行所 矢吹町公民館 矢吹中学校 矢吹小学校

発行者 公民館長

編集者 大槻正治

創刊 昭和二十九年七月二十日

仮称「やぶき」として出発、紙名募集をして第二号より「教育やぶき」となる

〔町史編集室調〕

〔注〕昭和三十年七月二十日 第十一号より発行所が矢吹小学校PTAと矢吹中学校PTAとなる

昭和三十一年六月三十日 第二十三号より発行所が矢吹小学校PTAとなり編集は矢吹小学校文化部となる。

四二二 昭和三十一年「広報やぶき」創刊

創刊に当って

佐藤 卯平

昭和三十一年の元旦に当り『広報やぶき』第一号が発刊される様になったことは誠に喜ばしいことであります。

先に旧矢吹町公民館は矢小学校機関紙及び矢中PTA機関紙と合同して『教育やぶき』を刊行して居りましたが町村合併に伴って学校教育面も社会教育面も規模が大きくなりましたので『教育やぶき』は学校側で統刊することになり新たに公民館側で『広報やぶき』を発刊することになった次第であります。

広報やぶきの担う使命と責任は極めて重大でこれによって町づ

くりが出来住みよい社会が築きあげられる様になることを確信いたします。然し『広報やぶき』は印刷物であります。町の皆様によく読んで味わって頂いたり御批判をいたゞいてこそ其の使命が達成することが出来るものと信じます。

今度矢吹町公民館連絡協議会を結成いたしました。これは合併に伴う公民館の使命は大矢吹の町づくりと云う共通の目標と、各地区ごとに其の地区の特殊性の活動部面とがありますので各地区公民館は従来通り其地区の特殊性のもとに活躍し、本会は三公民館の連絡協調に当り、更に大矢吹町の町づくりという目標達成に力をつくそうという意図によるものであります。

町村合併に伴う公民館の有り方については種々の形態がございますが県教委社会教育課に於ては県内各公民館の有り方を比較検討した結果この形態が最もよいと云うて居ります。

『広報やぶき』は本会に於て発刊し大矢吹町の町づくりに向って活躍すると共に三館の活動状況を報じ合つて連絡協調に資する積りであります。

〔昭31・1 10「広報やぶき」〕

四一三〔昭和四四年「広報やぶき」創刊〕

「広報やぶき」の発刊について

矢吹町長 大木代吉

従来から永年ご愛読ただいてまいりました「公民館だより」は皆さまがたのご協力によって、広報活動としての役割りを果たしてまいりましたが、今月からさらに新しく毎月発刊するようにあらため、広報紙名も「広報やぶき」としました。

内容も町の行政広報、公民館報、議会報の合併号とし、ころもがえしたニュース版として、つねに町民の皆様との「かけ橋」となつてよりよい皆さんの「広報紙」にしてゆくよう努力しますから、何分のご協力と、ご援助をお願いします。

〔昭44・4・22「広報やぶき」創刊号抜粋〕

四一四〔昭和四八年「世間視」創刊〕

世間視（よまし） 無料配布

発行所 矢吹教会

青任者 淵田 勝

創刊 昭和四十八年五月十一日

この方々の励ましに

世間視への献金者

感謝をもって 報告します

日本キリスト教団矢吹教会（的場七）は、その名に矢吹とついているかぎり、矢吹町の問題を聖書の信仰によってになうと言うところから、まず、新聞をつくり、教会の考え方を町の人に知っ

でもらう、町の問題に対する教会の考えを知らせようとなった。
この事業に多くの方のご協力があり、感謝を申し上げると共に、
特に献金者のお名前を發表します。

(氏名 略)

[昭48・5・11「世間祝」第一号抜粋]

四一五 [昭和四八年「渡辺新聞店ニュース」創刊]

渡辺新聞店 ニュース 無料配布

発行所 渡辺新聞店

発行人 渡辺清房

創刊 昭和四十八年五月十日

原稿募集

この新聞は毎月二回(一日、十五日)発行の予定です。あなたの町や村のニュース読者の声、文芸(短歌、俳句、詩)も定期的に掲載してゆきますので係まで連絡して下さい。また広告も毎号のせますのでご利用下さい。

(第一号の主な記事)

新聞定価値上げか——危機に立つ宅配制度

バイト学生からの手紙

店員紹介

レジャー情報

育成会だより

渡辺新聞店告示板

人事消息

[昭48・5・10「渡辺新聞店ニュース」第一号抜粋]

四一六 [昭和五二年「夕刊やぶき」創刊]

夕刊やぶき

発行所 夕刊やぶき新聞社

発行人 末永百合雄

創刊 昭和五十二年十二月一日

有料 毎日発行夕刊

[町史編集室調]

(4) 宗教・信仰

四一七 [明治五年寺院明細]

(表紙)

「

天台宗
新義真言宗
禪曹洞宗

本末一派寺院明細帳

磐前県管轄

磐城国石川郡

第五大区十四小区「

近江国志賀郡

天台宗一派

但 開山世代等之旧記ハ天保度ニ焼失仕更ニ相訳リ不申

候

比叡山延暦寺

磐前県管轄

磐城国石川郡松崎村

当住無之ニ付福島県管轄白河郡三城目村

本山

妙法山

蓮花寺

城見寺法伝兼務

同 国同 郡沢井村

一境内 但 反別八畝十五歩 御貫地

小本寺

無住

此高七斗二升二合五勺

安養寺末

一檀家 三軒

但 当住無之ニ付旧記等更ニ無御座開山誰世代等相訳リ

不申候

右小本寺沢井村安養寺静海兼務

山城国醍醐

新儀真言宗

一境内 但 此反別 一反歩

報忍院

磐前県管轄

磐城国石川郡堤村

高 八斗五升

本山

三宝寺

一檀家 二十二軒

同 国同 郡

無住

石川町村

山城国醍醐

新儀真言宗

中本寺

報忍院

磐前県管轄

磐城国石川郡中野目村

乘蓮寺末

本山

薬師寺

但 当住無之ニ付旧記等更ニ無御座開山誰世代相訳リ不

同 国同 郡

無住

申候

石川町村

磐城国白川郡三城目 城見寺法伝兼務

中本山

一境内 但 反別一反歩 除地也

乘蓮寺末

此高八斗八升

一檀家 十八軒

近江国志賀郡

天台宗一派

比叡山延暦寺

磐前県管轄

本山

磐城国石川郡神田村

慈眼寺

同 国白河郡

無住

白河町村

小本寺

永蔵寺末

但 享和度ヨリ無住職ニ付開山誰世代等未詳候

当時福島県管轄白河郡三城目村

景政寺住僧兼務

一境内 八反歩 内高八斗五升

此反別一反歩

一檀家 二十軒 高八斗一升六合六勺五才

此反別二反三畝十歩

御貢税地

残反別四反六畝二十歩

山林ニ御座候

大本山 能^(州)劭総持寺末派 禅曹洞宗通幻派

小本山 繁松院末

磐前県管轄

磐城国石川郡北田町繁松

磐城国石川郡中畑村

(天保)

清林山

院之開山天文二十二癸巳

澄江寺

年三月十九日洲建作

第二十四世住職 巨学

法孫四世分派天正十四丙

壬申四十二才

戊年八月朔日澄江寺開山

日庵宗永和尚 此代ヨリ拙僧迄二十四世也

福島県管轄同国白河郡向寺町農山口松五良五男天保十一子年十

月二十三日於同国同郡滑津村同宗善通寺得度其以後同国同郡白

河町関川寺ニ学修行仕嘉永六壬巳年二月十二日当澄江寺江初任

安政二申卯年十月十九日於越州永平寺色衣

弟子

覚隆

壬申十三歳

同国石川郡石川高田町農佐原清兵衛五男

明治戊辰年十二月二十一日於右澄江寺得度

一境内 但 反別一町

内 上畑 一反歩

此高八斗五升

除地

下々畑五反一畝歩

此高一石八斗八升五合 貢税地

林ニ而村方弁納地

残反別三反九畝歩

山林ニ候境内也

一檀家 百十軒

右 澄江寺末

同宗同村

但 無檀無住旧記等無之更

清少院

ニ創立年歴

其外共不詳ニ候澄江寺巨学兼務

境内

上畑一反歩

此高八斗五升 除地

以上 僧二人

山城国醍醐

報忍院

本山

同 国同郡

石川下泉町村

中本山

乗蓮寺末

但 無住ニ付旧記等更ニ無之世代等不詳候 当時福島県

管轄同国白河郡三城目村同宗光稲山城見寺住僧法伝

新義真言宗一派

磐前県管轄

磐城国石川郡大畑村

宝楽寺

無住

兼務

一境内 但 此反別二反歩

此内反別一反歩 居屋敷歩

此高八斗五升 除地

残 反別一反六畝歩 村地貢稅地

此高三斗六升

一檀家 二十三軒

山城国南醍醐

松橋無量寿院

同 国白河郡

小田川村

小本山

宝積院末

但シ年来無住旧記等更ニ無之創立年歴世代等不詳ニ候福

島県管轄同国白河郡小田川村右小本寺宝積院住僧泉

叶兼務

一檀家 一軒

一境内 此反別一反歩

此高八斗五升

新義真言宗

磐前県管轄

磐城国石川郡中畑村

法界山

来 迎院

無住

右

小本山

宝積院末

一來迎院末

米迎院同様無住年号千支開山誰創建年歴不詳ニ候

一無檀

境内 反別一反歩

此高八斗五升

同宗同村

法性院

無住

右

此高八斗五升

十二歩

此高四升二合

貢税地村方弁納

残 反別五反六畝歩 山林境内也

同宗同村

正福寺末

但 年來無住年号千支創立

年歴不詳ニ候

慈法院

無住

無檀

境内 此反別一反歩

高八斗五升

除地

山城国南醍醐

松橋無量寿院

本山

同 国同 郡小田川村

小本寺

宝積院末

但 無住ニ付旧記等更ニ無之開山世代相沢不申候當時小

本寺宝積院泉畔兼務

一檀家 三十軒

境内 但 此反別六反別六反六畝

内一反歩

除地

近江国志賀郡

本山

一比叡山末

年來無住旧記等更

ニ無之創立年歴世

代不詳ニ候

當時福島県管轄磐城国白河郡白河町村永藏寺ニテ兼務

天台宗

磐前県管轄磐城国

石川郡中畑新田村

愛宕山長寿院

幸福寺

無住

一境内 但 反別二反四畝歩

中畑一反歩

此高七斗

貢税地

此税錢三百文

残 一反四畝歩

山林ニ候

一檀家 三十五軒

(A.B.)
町観音寺江移転同六巳八月当所大福寺ニ転住明治四未年三月願
之上隠居

以上僧 一人

一境内 此反別二反五畝歩

此高二石一斗二升五合 除地

一聖徳太子境内

此反別二反歩

一檀家 九十九軒

除地

山城国南醍醐

新義真言宗

松橋無量寿院

磐前県管轄磐城国

本山

石川郡矢吹郷

八幡山正明院

同 国白河郡小田川村

大福寺

中本山

一本山 近江国志賀郡

天台宗一派

一宝積院末

宗祖伝教大師法孫幾世不詳

(マヤ)
享保二壬辰年十月有智開山色衣寺

有智ヨリ二十五世前住隠居

実賢

壬申六十二才

寺住職光田法印兼務

若松県管轄岩代国耶麻郡本寺邸修驗延命院三男同所於恵日寺而

文政五年九月得度同十一子年十月於京都智積院而修学天保十

一子年正月右本寺邸恵日寺江住職嘉永四亥年六月若松道場小路

比叡山延暦寺末

磐前県磐城国石川郡森宿郷

(マヤ)
慶長元年亥十月

広石山長命寺

比叡山延暦寺ヨリ分派ニテ開山円観儒正ト伝義候得度

享保三戌年五月殿堂旧記等不残焼失ニテ不詳ニ候当住

無之福島県管轄岩代国岩瀬郡須賀川町同宗中本寺千用

第二十七世

留守居僧

定棟

年四十五才

若松県貴属士族大熊録弥二男天保十一子年二月二十二日
岩代国会津郡若松町天寧ニヲエテ得度

以上 留守居 一人

一境内 此反別六反六歩

内 六畝二十一歩 貢税地

此高六斗一升三合

五反八畝二十九歩 山林境内也

一檀家 六十軒

磐前県管轄磐城国石川郡

第五大区十四小区

総計

寺院 十四ヶ寺 但 末寺也

内 天台宗 四ヶ寺 有檀無住

新義真言宗 八ヶ寺 有檀無住

内 一ヶ寺 無檀無住

禪曹洞宗 二ヶ寺 有檀

内 一ヶ寺 無檀無住

僧四人 内住 職 一人

留守居僧 二人

(以下) 弟子僧 一人

境内 反別四町七反五畝二十五歩

内一町五反三畝十五歩

此高三石四升七合五勺 除地

一町八畝十三歩

此高三石七斗九升二合 貢税地

二町一反三畝二十七歩 境内山林之地

檀家 四百三十軒

右者当磐前県管轄寺院本末其外取調候処書面之通相違無之候也

明治五壬申年七月 第五大区 小十四区

区长 小針 七左エ門[㊦]

副区长 会田 惣左エ門[㊦]

磐前県

御役所

〔中畑 小針頼晴家文書〕

四一八〔明治一二年矢吹村の社寺〕

(表紙)

「明治十一年十一月

社寺 明細帳

福島県西白河郡矢吹村」

〔矢吹神社〕

村社 磐城国白河郡矢吹村字大林鎮座

矢吹神社 式外

一祭 神 須佐之男命 品田別名 鎌倉景政靈

一由 緒 不詳

一勸 請 須佐之男命康平三丁子年六月十五日勸請品田別命元龜元年四月十五日勸請景政靈神貞享元年九月二十九日勸請

一社 殿 神殿 縱三尺三寸ッッ 幣殿 縱二間 廊下 縱三間 横三尺五寸ッッ 横一間半 横一間

拜殿 縱五間半 玉垣 延長十八間三尺 木鳥居 高一丈四尺一

基 高七尺一基 石鳥居 高一丈三尺 石段 十七階 明六尺 幅九尺

同 幅五間 石燈籠 高三丈 石鹽嗽磐 長二尺 幅一階

一同 造 營 一村持

一社 号 改 替 旧牛頭天王明治元年六月十五日矢吹神社ト改称ス

一神 位 宣下無御座候

一祭 日 九月二十九日

一什 宝 物 神輿一具 御神酒瓶三ッ 旗五本 幕二張 太太鼓 一ッ 水引三張 代々面二十四ッ 鳥兜二ッ ヨウ

ラク一ッ 火焰太鼓一ッ 千早一衣 大口一具 鍵 一丁

一境 内地 九百四十三坪 官有地

一境 内樹木 杉目通尺回以上二百十一本 同尺回以下五十本 雑木目通尺回以上十五本

一持 添 地 無之

一寄 附 地 無之

一 県 庁 距 離 十七里十七町五間

一 永 統 法 方 氏子ヨリ金二十五円ヲ積立此利子ヲ以テ法トス

一 氏 子 百五十三戸

一 神 官 教導職試補小林盛房 警城国白河郡泉崎村郷社稻荷神社祠掌同国同郡矢吹村平民 境内末社 粟島神社

一祭神 少名彦名命

一社殿 縱一間半 横一間

一祭日 三月十五日

同 金刀比羅神社

一祭神 大物主命

一社殿 神殿 縱一間 横一間

一祭日 七月十日

同 八幡神社

一祭神 応神天皇

一社殿 神殿 方面一間

一祭日 四月十五日

同 愛宕神社 祭神 駒遇突智命

同 稻荷神社 祭神 稻倉魂命

同 妙見神社 同天御中主命

同 大山祇神社 同大山祇命

同 高湯神社 同月読命

同 秋葉神社 同火産霊命
 同 松尾神社 同大山昨命
 同 三峯神社 同大山祇命
 同 住吉神社 同上簡男命
 同 雷神社 同若雷命
 同 疱瘡神 同少名彥名命

右各社殿小祠 祭日七月十五日

右以通相違無御座候以上

磐城国白河郡泉崎村郷社稻荷神社祠掌兼磐城国白河郡矢吹村々社矢吹神社兼務祠掌

明治十一年十一月

氏子総代 緑川 万之助
 小林 盛房
 什 長 大竹 千代吉
 用 係 長 尾 半蔵
 副戸長 鈴木 藤右エ門

福島県令 山 吉 盛 典殿

磐城国白河郡矢吹村字大林

矢吹神社現境内縮図

(図略)

磐城国白河郡矢吹村字東側

遙拝所

一建 物 縦一間四尺
 横一間四尺

一造 營 六十三戸

一境内地 九十六歩 民有地名受長尾半次郎

一永統方法 金十円積立永統法トス

右之通相違無御座候以上

磐城国白河郡矢吹村惣代

明治十一年十一月

長 尾 半次郎
 什 長 安藤 六左エ門
 用 係 長 尾 半蔵
 副戸長 鈴木 藤右エ門

福島県令 山 吉 盛 典殿

磐城国白河郡第九区矢吹村

遙拝所境内 九十六坪

(図略)

神社財産宝物登録申請

(朱書) 大正四年十二月二十四日登録済

西白河郡矢吹町大字矢吹字西側五十三番地ノ口

村社矢吹神社

登錄 年月日 番号	名称 員數	品質・形状・寸尺	作者・伝来
大正四年三月四日 第一号	太刀一口	長二尺五寸	氏子大野ナヲ寄附
同年同月同日 第二号	太刀一口	長二尺七寸	氏子鈴木百松寄附
同年同月同日 第三号	大弓一張		氏子佐久間七右工 門外十名寄附
同年同月同日 第四号	砲彈四個	長六寸直徑二寸七分	三十七八年戰役戰 利品陸軍省寄贈
大正同年同月同日 第五号	方匙二丁	長一尺七寸	右同斷
同年同月同日 第六号	鏡三枚	徑八寸	氏子仲西キン寄附
同年同月同日 第七号	棟札三枚	桧板長二尺五寸 巾五寸祭神名	

右登錄相成度比段申請候也

右社 掌 小林盛重

氏子惣代 藤田熊五郎

渡辺治平

矢吹平司

佐久間 巖

福島県知事 堀口助治殿

〔八幡神社〕

小社 磐城国白河郡中畑新田村字八幡山鎮座

八幡神社 式外

一祭 神 譽田別命

一由 緒 不詳

一勸 請 不詳

一社 殿 神殿 縦三尺五寸 雨覆 縦二間 石鳥居 高サ九尺 一基

木鳥居 高一丈五尺 石段 七十九階 石水鉢 長三尺

巾三 石灯笼 高一丈一基

一同造 營 一村持

一祭 日 九月十一日

一什宝物 旗一本但四反旗

一境内 地 五百五十六坪 官有地

一境内 樹木 杉目通尺回以上十三本 松目通尺回以上二十一本

一永統 法方 一戸ニ付米一升ツツ七ヶ年出穀可仕候尤モ氏子四十

四戸一ヶ年四斗四升也金六円二十五錢ヲ積立是ヲ以

永統方トス

一県庁 距離 十七里二十三町十四間四尺

一神 官 教導職試補小貫俊光 岩代国岩瀬郡 笠石村平民

境内末社 八雲神社 一祭神 須佐之男命

一社殿 神殿小祠

一祭日 九月十一日

抱瘡神社

一祭神 月読命

一社殿 神殿小祠

一祭日 九月十一日

雷神社

一祭神 別雷命

一社殿 神殿小祠

一祭日 九月十一日

粟島神社

一祭神 少名彥命

一社殿 神殿小祠

一祭日 九月十一日

右之通相違無御座候以上

磐城国白河郡泉崎村郷社烏峠稲荷社祠掌
磐城国白河郡中畑新田村小社八幡神社兼務祠掌

明治十一年十一月

小貫俊光

氏子総代 佐久間 弥吉

什長 小針清次

用掛 梅宮茂一

副戸長 鈴木藤右門

福島県令 山吉盛典殿

磐城国白河郡第九区中畑新田村

八幡神社境内 五百五十六坪

(図略)

(日吉神社)

村社 磐城国白河郡大和久村字西後鎮座

日吉神社 式外

一祭神 大山咋命

一由緒 不詳

一勅請 寛保元酉年四月十七日

一社殿 神殿縦二尺五寸 雨覆縦三間 木鳥居高九尺 石段

幅四尺

一同造営 一村持

一神号改替 無之

一神位 宣下無御座候

一祭日 十月二十日

一什宝物 無之

(図略)

一 寄附物 鈴一ツ

一 境内地 七百三十六坪 官有地

一 寄附地 林反別二反七畝二十歩 名受小泉辰吉大和久村

一 境内樹木 杉目通尺回以上七十本 榎目通尺回以上四十本 榎目通尺回以上四十本 唐松同一本 樺同七本 樺同一本

栗同三本 桜同一本

一 梟庁距離 十七里四十四町三間四尺

一 氏 子 四十四戸

一 永統法方 金一円年々氏子中ヨリ積立十ヶ年間此利子ヲ以テ永統法方トス

一 神 官 權訓導龜森甫磐城国白河郡 中新城村平民

右之通相違無御座候以上

磐城国白河郡泉崎村郷社稻荷神社祠掌
兼同国同郡中新城村々社鹿島神社祠掌

明治十一年十一月

龜 森 甫

氏子総代 芳賀市右エ門

什 長 小 泉 辰 吉

用 掛 芳賀市右エ門

副戸長 鈴木藤右エ門

福島県令 山 吉 盛 典殿

磐城国白河郡第九区大和久村

日吉神社境内 七百三十六坪

〔三光稲荷神社〕

明 細 書

磐城国西白河郡矢吹村大字矢吹字大池南十五番地鎮座小社

三光稲荷神社

祭 神 稻倉魂命

由 緒 不詳

勅 請 年号不詳

社 殿 神殿神明造縦一間五分 拝殿縦一間五分 雨戸二本
横二間 障子戸四本

同造営 信仰者永統金ニテ造営

神 位 正一位三光稲荷大明神

慶応三年四月

神祇伯王家令神祇少史齋宿禰宣下

祭 日 四月二十四日

什 物 御綸旨箱

副綸一通

神 鏡 一尺台附

寄附物 大旗一本

同 幕 三張

同県同国同郡同村大字矢吹
字東側九十番地

磐城国西白河郡矢吹村大字矢吹字大池
南十五番地ノ内三光稻荷神社境内縮図

三、堂宇其他建物

種類名称	構	造	建坪又ハ縦横間數	境内外ノ區別	備考
本堂	木造瓦葺	平家間口六間半	境内	大正十年八月建立	
庫裡	木造トタン葺	平家間口四間半	境内	明治三十二年三月建立	
鐘樓堂	木造瓦葺	四本柱立九尺四面	境内	明治四十四年五月 渡辺利七寄附	

四、基本財産 現金ノ部

金額	利率	預入先	預入人名義
金	年七分五厘	須賀川銀行矢吹出張所	大福寺住職熊倉秀詮

有価証券ノ部

種別	額面	枚数	額面合計	保管方法

土地ノ部

地目	反別	所在	番
畑	三六	矢吹町大字矢吹字西側一二三番	
畑	三三	大林六八番	
畑	三三	六九ノ一番	
畑	三三	七〇番	
畑	三七	六五番	
畑	三二	六九ノ二番	
畑	八三	西側三九ノ三番	
畑	一四三	要蔵林二番	
畑	六〇二	西古宿二番	
畑	二六	の場五六ノ二番	
田	三九	館山二八番	
田	三三	二九番	
田	三六	三〇番	
田	二二	三一番	
田	一五四	宮ノ前四四番	

田	三九	四五ノイ番
田	三三	四五ノロ番
田	四四	沢田三八番
田	元	七九番
田	六五	八〇番
田	三	八一番
山林	四九三	八二番
山林	二二〇	八幡二七番
山林	一四四	大林一一四番
山林	五〇五	西側三九ノ一番
山林		要蔵林三番

昭和三年六月十九日

右寺住職 熊倉秀詮

〔幸福寺〕

所在地 西白河郡矢吹町大字中畑新田字西浦三十五番

地ノ八号

宗派名 天台宗

寺院名 幸福寺

一住職 本兼務別 兼務 氏名 無住

二担家数 六十戸 担徒惣代数三人

三堂宇其他建物

種類名称	構造	坪数又ハ縦横間数	境内外ノ區別	備考
萱葺木造	平家	二坪縦四間横六間三間	境内	

四基本財産 現金ノ部

金額	利率	預入先	預入人名義
四〇円	年七分	矢吹銀行	佐久間与一郎 外二名

有価証券ノ部

種別	額面枚数	額面合計	保管方法
土地ノ部			

土地ノ部

地目	反別	所在地	番
畑	反	矢吹町大字中畑新田字西浦三十四番	
山林	四五同	三十七番	

天台宗叡山派

磐城国白河郡中畑新田村四番地

愛宕山 幸 福 寺

一本 山 叡山延暦寺 京都府大和国志賀郡坂本村

一開山創立 慶長十巳年四月二十三日自伝法印ヲ以テ開基トス

一堂 宇 本堂縦五間半 庫裡縦四間
横四間五分 庫裡横四間
一本 尊仏 不動尊木像一体 十王木像一体
一什 宝物 無之

一境内 地 二百三十六坪 官有地

一永統法方 檀中ヨリ寄附米年々米四斗二升ツツ積立仕候

一県庁距離 十七里二十三町十四間四尺

一檀 家 四十二戸

一無 住 兼務教導職試補太田光昌 磐城国白河郡太田川村堂願寺住職

右之通相違無御座候以上

磐城国白河郡太田川村常願寺住職

明治十一年十一月

太田光昌

檀中総代 佐久間 弥 吉
什 長 小 針 清 次
用 係 梅 宮 茂 一
副戸長 鈴木 藤右エ門

福島県令 山 吉 盛 典殿

磐城国白河郡第九区中畑新田村
幸福寺境内 二百三十六坪

(図略)

〔山王寺〕

所在地 西白河郡矢吹町大字大和久字大和内五七番地

宗派名 新義真言宗豊山派

寺院名 山王寺

一住職 本兼務別 兼住職 氏名 熊倉秀詮 慶応三年八月二

十四日生

二担家数 六十戸 担徒惣代数三人

三堂宇其他建物

種類名称	構造	建坪又ハ 縦横間数ノ 境内外別	備考
本堂	木造萱葺	間口七間半 奥行五間半	境内 建築年月不明
門	木造トタン葺	七尺八尺	境内 "
阿弥陀堂	木造瓦葺	平家間口一尺半 奥行一尺半	境外 大正四年二月再建

四基本財産 現金ノ部

金額	利率	預入先	預入人名義

有価証券ノ部

種別	額面枚数	額面合計	保管方法

土地ノ部

地目	反別	所	在	地番
宅地	反	矢吹町大字大和久字三峰森一番		
宅地	三坪	"	二番	
宅地	二坪	字大和内五五番		
畑	二四	"	五六番	
畑	三三	字曰田山五ノ八番		
畑	九六	"	二ノ九番	
畑	五三	"	二ノ八番	
田	三〇	字仁地八番		
田	四三	字曰田山二ノ二〇番		
田	四九	字笹目平一ノ二番		
山林	四〇	"	一ノ三番	
山林	四〇	字愛宕山五番		
山林	四〇	字西後四四番		

昭和三年六月十九日

右寺兼住職 熊倉秀詮

〔三峯山山王寺〕

真言宗新義派

磐城国白河郡大和久村三十七番地

三峯山 山王寺

一本 山 醍醐山 三宝院 京都府山城国宇治郡醍醐

一 開山創立 承応三年月日不詳

一堂 宇 本堂縦八間 大門縦三間
横六間

一本尊 仏 不動尊立像

一 什宝物 金一ツ

一 境内地 二百六坪 官有地

一 永統方法 金四円ツツ 檀中ヨリ七ヶ年間積金ヲ以テス

一 県庁距離 十七里三十二町三間四尺

一 檀 家 四十五戸

一 住 職 兼務磐城国白河郡白河町竜藏寺住職矢上明巖

右之通相違無御座候以上

磐城国白河郡白河町竜藏寺住職

矢上明巖

明治十一年十一月

檀中惣代 阿部好之助

什長 小泉辰吉

用係 芳賀市右エ門

副戸長 鈴木藤右エ門

福島県令 山吉盛典殿

磐城国白河郡第九区大和久村
山王寺境内 二百六坪

(図略)

〔阿弥陀堂〕

仏堂

阿弥陀堂 磐城国白河郡大和久村字古山王

一本尊 阿弥陀如来

一由緒 不詳

一 勧請 年月日不詳

一堂 宇 本堂縦九尺 石段二十七階
横七尺 幅三尺

一 境内地 三十九坪 民有地名受 阿部好之助

一 境内樹木 杉尺回以上十三本 桜同一本

一 永統方法^(ママ) 村中ニテ年々出金一円ツツ十ヶ年間積金ヲ以テス

一 県庁距離 十七里四十四町三間四尺

一 信者 四十四戸

一 受持 磐城国白河郡白河町竜藏寺住職 矢上明巖

右之通相違無御座候以上

白河郡白河町真言宗竜藏寺住職

明治十一年十一月

矢上明巖

一村総代 星留吉

什長 小泉辰吉

用掛 芳賀市右エ門

副戸長 鈴木藤右エ門

福島県令 山吉盛典殿

磐城国白河郡大和久村
阿弥陀仏境内 三十九坪

(図略)

〔町有 明11「社寺明細帳」〕

四一九〔大正四年矢吹の村々の神社〕

十四、中 畑 村

村社 八幡神社

中畑村大字中畑字根宿に鎮座す此地俗に観音山と呼び又館山と称す即中畠上野介晴辰の館址なりと云ふ境内四百十九坪官有地神殿方六尺雨覆縦四間半 拜殿縦二間 木鳥居高一丈三尺石鳥居高九尺横三間 横五間半 石段四十四階

祭神、菅田別尊 旧八幡大神と称せしか明治二年今の神号に改む、勧請の年代未詳、祭日八月十五日

氏子 百八十戸

社有財産 田一反六畝四歩、山林一反四畝五歩

境内末社 八雲神社、祭神素盞鳴命 疱瘡神社、祭神月読命 淡

島明神、祭神小彦名命 雷神社、祭神別雷尊

村社 近津神社

中畑村大字松倉字阿部沢鎮座境内二百二十二坪官有地神殿方二尺五寸雨覆縦三間二尺横三間

祭神、味鋌高彦根命 旧近津大明神と称せしか明治六年三月十五日今の神号に改む、祭日九月九日

白河風土記云 康平年中源義家朝臣奥州の賊徒安倍貞任と阿部沢にて雌雄を争ふ官軍利を得て尽く賊徒を切靡けたり首将及賊徒の屍を埋めたる胴塚とて在り凱旋の折甲を脱いて社中に納む故に里俗甲大明神と称せしと云伝ふ、

氏子 四十五戸

小社 住吉神社

中畑村大字住吉にあり境内五十五坪民有地神殿方三尺雨覆方二間 木鳥居高一丈 明八尺

祭神、中筒男命 明和四年九月勧請と云ふ、祭日十月十四日なり 信仰者 十九戸

境内末社 稻荷神社、祭神倉稻魂命 岐島神社、祭神市杵島姫命

八幡神社、祭神菅田別尊

十五、三 神 村

小社 住吉神社

三神村大字明神字子柄にあり境内三十九坪官有地神殿方三尺雨覆方二間

祭神、中筒男命 旧垂跡宮と称す明治十一年十二月今の神号に改む、勧請未詳祭日十月十九日

信仰者 二十四戸

天満宮

三神村大字明神字新田石山にあり小祠なり、

祭神、菅原道真 祭日は五月二十五日なり、勧請未詳

牛頭天王社

三神村大字明新字作田にあり石の小祠なり、

祭神、素戔鳴命 祭日九月九日、勧請未詳

小社 大綿住神社

三神村大字明新字平林にあり境内八十四坪官有地神殿縦一尺五寸
雨覆縦一間半 横二尺

祭神、豊玉姫命 旧竜神と称す明治二年今の神号に改む、勧請未
言祭日十一月三日なり、

信仰者 三戸

村社 八坂神社

三神村大字中野目字天王屋敷鎮座境内百九十二坪官有地神殿縦二
尺五寸 雨覆方二間拜殿縦二間高八尺石段三十三階

祭神、素戔鳴命 旧天王と称す明治二年今の神号に改む、祭日十
月七日、勧請未詳

氏子 八十三戸

維持法 中野目、堤、神田、明神、四区民の負担とす

境内末社 菅原神社、祭神菅原道真

小社 白髭神社

三神村大字神田字北宮崎にあり境内三百二十八坪官有地神殿縦一
尺八寸 雨覆方二間拜殿縦一間石灯籠二基木鳥居高八尺
祭神、猿田彦命 旧白髭大明神と称せしか明治二年今の神号に改
む、祭日十月七日、勧請未詳

信仰者 二十二戸

小社 住吉神社

三神村大字堤字神ノ内にあり境内二十五坪官有地神殿縦一尺八寸
雨覆方九尺石灯籠一基木鳥居高八尺石段二十二階

祭神、中筒男命 旧三宝荒神と称す明治三年十二月今の神号に改
む、勧請は寛延元年十一月十四日（一説正保四年）といふ、祭日
十月十日

信仰者 二十二戸

境内末社 八阪神社、祭神素戔鳴命 愛宕神社、祭神火産靈命
粟島神社、神社少彦名命

白河風土記云 祭神は村岡小五郎忠通朝臣桓武帝第四の皇子及鎌倉権五郎景政の霊也初め後朱雀帝の時忠通朝臣鎮官右將軍に相模カ撲模カ権守に任し鎌倉長尾郷に住す鎌倉系図には鎮守府將軍に任し奥州に住すとあり五子あり

長は三浦平太夫為通三浦に任す三浦氏の祖次は鎌倉権頭景成大庭氏の祖三は鎌倉四郎景村洛の一条四は梶原権太夫景通梶原に住す梶原氏の祖季は即景政なり

勢力絶倫九歳の時其力を試るに尋常ならず十歳能く戦場に赴くと云ふ、

鎌倉系図を考ふるに忠通二男鎌倉権太夫梶原の祖三男景成鎌倉権頭大庭の祖四男

景村鎌倉四郎とありて景政は景成か子の行にあり是に拠れば景政は

忠通か孫なるか景村は四郎と称すれば四男なること明けし、

永保二年清原武衡家衡か叛せし時源義家朝臣勅を奉し発向す忠通朝臣副將軍たり景政も父に従ひ戦功あり羽州厨川の合戦に鳥海弥三郎か射たる矢景政か左眼に中る景政其矢を抜かすして終に弥三郎を射殺す時に年十六なり其後忠通朝臣は年七十一にして陣中に卒す寛治三年九月十九日なり堀河帝の時忠通朝臣は耆老にして忠節軍功少からずとして其霊を鎌倉長尾郷に祀り御霊宮の号を贈り即景政兄弟五家流の氏神とす景政は当国の五郡常陸の二郡を賜はり本郡竹貫鎌田の城主となる因て鎌倉より御霊宮を三城目の郷に移し尚台山に勧請すと云ふ康治二年九月十八日景政六十八歳にして卒す其霊を御霊宮に祀り又鎌倉長尾郷にも合祀す後代武門の守神と敬ひ善を利し惡を罪す或は復讐の望あるもの或は目疾を患ふる

もの祈禱すれば皆驗ありとなし九月十八日十九日を祭日とす忠通朝臣及景政の忌日なればなり、縁起に忠通朝臣は江島弁財天帝仁寿三年に慈覺大師の創建也の化身なり因て毎歳十月上巳を御霊宮の祭とす故に氏子芦毛の馬に乗らす鯨を食はすと始め御霊を祭る時社地に井を堀ること九なりしか八は水湧き一は潮生れて鯨なるなどの瑞まりきと云ふ、

一説に景政兄弟五人の霊を加へ祭り長く子孫を守る処とす因て忠通朝臣を御霊宮と称し其余は五霊宮或は五流宮といふ又為通を三浦に又為通を三浦に景成を大庭に景村を白井に景通を梶原に景政を三城目及足利に祭るか如きは後世其所領に就て勧請すれはなり又鎌倉志に御霊宮は長谷村より西南の方にあり鎌倉権五郎景政か祠あり長谷にある御霊宮の本なり鎌倉系図を考ふるに景政昔此辺に居住したる故其祠を此処に建てたるならん東鑑に建久五年正月御霊社御奉幣八田知家御使たりと御霊社の事往々見江たり然れとも忠通朝臣を祭ることなし、

氏子 百六十九戸

什宝物 軍配团扇中に〇休如き紋あり文字金なり 属里骨五本長

観音の像を画く伝 系図一卷 甲冑一領 以上景政寺と共有 説軍配团扇に同じ

境内末社 八雲神社、祭神素戔鳴命田牛頭天王社と称し部正八幡

社、祭神菅田別尊旧部落の西方にあ皇子八幡神社、祭神同前

旧石清水八幡社と称し部落の西三丁許にあり神鉢銅像長五寸往古鷹巢館主大学といふ者三の廊応神館に勧請せしを天正元年中

畑上野介晴辰の
移せしものと云 近津神社、祭神味鋌高彦根命 愛宕神社、祭
神軻遇突智命 稻荷神社、祭神倉稻魂命 旧部落の西方四丁許に
に当りし故勸 西宮神社、祭神大蛭子命 熊野神社、祭神伊弉
諾命、伊弉冊命

以上は明治二年当社内に遷座せるものなり、

村社 飯成神社

三神村大字須乗字宮崎鎮座境内百二十二坪官有地神殿横一尺七寸
雨覆縦一間半 拝殿縦三間 石灯笼對木鳥居一

祭神、倉稻魂命 旧正一位飯成大明神と称せしか明治三年二月今

の神号に改む、勸請末詳祭日九月九日

氏子 十戸

村社 諏訪神社

三神村大字須乗字一本木鎮座境内八百八十七坪官有地神殿縦三尺
七寸流雨覆縦一間五尺石鳥居高一丈 破風造雨覆横二間一尺石鳥居明五尺五寸 木鳥居明五尺五寸

祭神、建御方命 旧正一位諏訪大明神と称せしか明治三年二月

今の神号に改む、祭日七月二十七日、勸請の年代詳ならず、

氏子 十八戸

十六、矢吹町

村社 矢吹神社

矢吹町大字矢吹字大森鎮座境内七百三十六坪官有地町の西側にし
て古杉蔭鬱自ら森巖を覓江神殿三社並立各縦三尺 幣殿縦二間
横三尺五寸 幣殿横一間

半廊長二間 廊下間一問 拝殿横五間半 玉垣延長十八間 石灯笼三基 盥水石一基 石鳥居
二基 各高一丈三尺 木鳥居一基 石段十七階

祭神、素鳴彥命 旧牛頭天王と称す 丁酉年六月十五日勸請 菅田別尊 旧八幡宮と称す
鎌倉景政 旧御霊社と称す 貞享元年九月二十九日勸請 明治元年六月十五日

三社を合せて矢吹神社と改称す祭日は九月二十九日なり、

氏子 百五十三戸

境内末社 粟島神社、祭神少彦名命 金刀比羅神社、祭神大物主

神 八幡神社、祭神応神天皇 愛宕神社、祭神軻遇突智神 稻

荷神社、祭神倉稻魂命 妙見神社、祭神天御中主命 大山祇神

社、祭神大山祇命 高湯神社、祭神月読命 秋葉神社、祭神火

産靈命 松尾神社、祭神大山昨命 三峯神社、祭神上簡男命

住吉神社 雷神社、祭神若雷命 疱瘡神社、祭神少彦名命

小社 滝八幡神社

矢吹町大字矢吹にあり西側は石壁三丈余石穴に三十三観音を彫刻

せり半腹に幅五六分長五尺許の裂虧あり此に雌雄の蛇栖にて朔望

に参詣する者は間々之を見ることありと云伝へ里人之を神跡と称

す又南方に馬尾滝と称する溪流あり故に俗に馬尾八幡とも称す、

祭神、菅田別尊 康平年中八幡太郎義家奥州の賊徒征伐凱旋の時

建立す其際本社を簡柄にて葺きたり矢吹の地名実之に之に起

小社 三光稻荷神社

矢吹町大字矢吹字大池南にあり白狐石造一基鹽水石一基木鳥居二基

祭神、倉稻魂命 伝云昔此地大池の辺に毎夜三の光を見る里人恐怖し五穀実らず長重常吉といふ二人の者あり山城国伏見に至りて

稻荷社に詣て長元四年四月二十四日日本社を大池南に勧請す三光稻荷大明神と称す爾來豊稔相統き信仰する者頗に加はり毎年八朔の日を以て初穂を献しるを例とせり、

什宝物 神鏡丸形、一附 刀二振一は長光作一は盛運作

村社 日吉神社

矢吹町大字大和久字西後鎮座境内七百三十六坪官有地神殿横二尺五寸 雨覆縦二間石段三十八階

祭神、大山咋命 寛保元酉年四月十七日勧請と云、由緒未詳、祭

日十月二十日

氏子 五十七戸

社有財産 山林二反二十二歩

小社 八幡神社

矢吹町大字中畑新田字八幡山にあり境内五百五十六坪官有地神殿

縦三尺 雨覆縦二間石灯籠一盃水石一基鳥居高七尺石段七十

祭神、菅田別尊 慶長十三年本郡中畑より勧請すと云、祭日九月

十一日

信仰者 四十七戸

境内末社 八雲神社、祭神素戔鳴命 抱瘡神社、祭神日読命 雷神社、祭神別雷命 粟島神社、祭神少彦名命

〔大4刊「西白河郡誌」抜粋〕

四二〇〔大正四年矢吹の村々の寺院〕

十三、中畑村

青林山 澄江寺
地藏院

中畑村大字中畑字本村にあり境内三百六十三坪官有地附近に曾根抱松と唱ふる奇木あり又中畑の大杉と称せられ周囲十八尺の大樹あり共に此地方に有名なるものなり本堂縦七間半庫裡縦五間廊巾

一間山門縦三間横二間 横六間半 横十間 廊巾一間山門樓上に梵鐘を掛く

曹洞宗通幻派、石川郡繁松院の末寺なり、

本尊、延命地藏菩薩 木仏坐像 長一尺八寸 中島上野介晴辰其先澄江心光大禪

定尼菩提の為に創建月庵宗永大和尚の開山なり其年代詳ならされ

とも澄江心光大禪定尼の皇女と云伝 掩粧は貞和三丁亥年五月二

十三日にして初代宗永和尚は天正十四年丙亥年八月十八日第二代

安居全和尚に天正二年十月の示寂なれば遠く天正以前なるへし当

寺古は今の平鉢清林山に在りしが後根宿に移り更に今の地に転し

たりと云ふ本堂に晴辰の位牌あり法号を澄江寺殿一法全心得居士

といふ、

檀家 百五十戸

什宝物 達磨大師木仏大権修利菩薩木像地藏尊木像涅槃像一幅五百羅漢一幅

寺有財産 宅地二反三畝二十三歩、田二町八畝二十四歩、畑一町一反三畝二十七歩、山林四町一反二十三歩、原野五反二畝十歩
境内堂宇 観音堂縦五尺本尊、子安観世音菩薩、縁起未詳

観音堂

中畑村大字中畑字根宿館山にあり境内百三十四坪民有地本堂方三間

本尊、正観世音木仏坐像長七寸八分 仁寿三年の建立にして古城主熊井上野介といひし人の守本尊作者は慈覚大師なりと云伝ふ、縁日は四月十八日

信仰者 百八十戸

維持法 山林一反歩の収益及信者の寄附に依る、

長慶山 正福寺

中畑村大字中畑字原宿にあり境内四百二十三坪官有地本堂縦五間半庫裡縦三間半廊長九尺山門方九尺
新義真言宗豊山派、本山大和国長谷寺、

本尊、大日如来木仏坐像長一尺八寸慶長三戊戌年七月十日長慶法師開山同五年庚午十月十日創立、

檀家 三十四戸

什宝物 両大師木像及釈迦牟尼仏像金銅像各一鉢十六善神画像一

幅曼荼羅三軸

寺有財産 田二反二畝二十二歩、畑四反二十三歩、山林五反一畝十六歩、原野三反七畝十三歩

境内仏堂 薬師堂方三間半 本尊薬師如来木仏坐像長一尺八寸

白幡山 宝蔵院

中畑大字松倉にあり境内五百十九坪民有地本堂縦四間

新義真言宗豊山派、本山大和国長谷寺なり、
本尊、大日如来木仏座像長一尺五寸阿弥陀如来金仏座像長一尺五寸厨子入 永仁年中水戸宥光と云僧開基すと云ふ記録伝はらされは詳ならず、

檀家 四十五戸 寺有財産 寄附金二十六円

十四、三神村

榮寿山 慈眼寺

三神村大字神田字東笠の内にあり境内八十四坪官有地本堂縦三間二尺庫裡縦三間二尺

天台宗叡山派、本山は比叡山延暦寺なり、
本尊、観世音木仏座像長二尺五寸 万治三庚子年六月四日慈眼大師開基 慈眼大師は万治三年より十七年前寛永二十年十月二日寂す本伝甚不審し

檀家 二十戸 什宝物 子安観音像一鉢

寺有財産 田二反五畝十二歩、畑二反一畝五歩、山林二反八畝三歩

境外仏堂 字笠の内にあり境内九坪堂方二間

(カヤ)

本尊、石仏坐像長三尺宝永三巳丑年地藏尊小兒に化身して里民の田植を補助せしことありとて俗に田植地藏と称ふ縁起詳ならず縁日は三月二十四日なり、

観音堂

三神村大字明神字館山にあり境内三十九坪官有地本堂方三間石段十三階

本尊、馬頭観世音木仏座長八寸厨子入 縁日三月十二日、

白河風土記云 寛治年間源義家朝臣出羽国金沢にて武衡家衡を攻伐の爲当国下向の時藤田城今高田領中野村の地なりに在陣ありしに遠藤但馬と云者連銭芦毛の馬に沓百足を付けて義家朝臣に献しけるに凱旋の節彼の但馬か宅地を廻らして十町四方の地を沓打料として与へられ並に馬頭観音堂は建立ありて村の名を明賀の文字に改め給ふといふ本村名往古明武と云 字沓打といふ地今に在り其後文治年間源頼朝公藤田城に着陣の時此馬頭観音に参詣ありて阿武隈川の渡にて咏歌ありと云伝ふ、歌

石川の館の麓の阿武隈に明賀の松の影ぞうつらふ

信仰者 二十五戸

南台山 景政寺
東光院

三神村大字三城目字上町にあり其地直に村社御霊神社に隣す境内四百九十九坪官有地本堂縦五間半庫裡縦五間半山門高一丈石灯籠横六間横四間 明八尺二基

天台宗叡山派、本山は比叡山延暦寺なり、

本尊、薬師如来木仏立像長一尺七寸五分聖德太子作推古天皇の御宇幾内七道に頒祀せられたる日本八薬師の一と云 伝脇士、不動尊木像慈覚大師作と云ふ 推古天皇の御宇僧惠慈勅を奉して草建

永福寺と号す延暦九年東夷反乱兵變に罹りしか征夷大將軍坂上田村麻呂再建す天慶二年又延焼せしか同九年結山和尚建營す康治二年鎌倉景政を当寺に葬る依て寺号を景政と改む天正二年円海和尚中興す宝永二年又自火に罹り正徳五年伝能和尚建造す即現今の堂宇なり当寺往古は三論宗なりしか中頃天台宗に属し白河町永藏寺の末寺となれりと云ふ、

縁起云 南台山景政寺者、平景政之神廟也、其先出自人皇五十

代桓武天皇、第四皇子一品式部卿葛原親王、其子高見王、次高

望王、賜平姓、次良兼、又名良文、始爲武家、四代孫忠通、号

村岡五郎、武勇譽于世矣、後朱雀院御宇、補鎮守府將軍、相模

權守、而住鎌倉長尾郷、故称鎌倉權守也、後冷泉院御宇、永承

六年、奥州阿倍頼時起乱、詔于源義家(ミナモト)、東征而降夷賊、天喜

五歲阿倍等背法拋衣川城、頼義父子率兵攻之、頼時中矢而死康

平五年討貞任、擒宗任而凱旋、白河院御宇、永保二歲、義家任

陸奥守入宮城府、欲治奥羽二州、然清原武衡家衡等不降之、守

羽州仙北金沢城而相戰、忠通威蒙副將之勦而竭軍功、寛治三年

九月十九日依連年之軍勞臥病、行齡七十一、而卒羽州陣中、御

靈宮是也、有五子一男爲通、始称为次、住三浦、故号三浦平太

夫、是三浦氏之祖也、武功不劣于父、与父趣奥州、勵軍忠矣、二男景成、号鎌倉權太夫、後住大庭、故改大庭、是大庭氏之祖也、三男景村、号鎌倉四郎太夫、依為家嫡、勤滝口、住洛陽一条也、治承年中、源賴朝入鎌倉由井郷、世以称鎌倉殿、故憚鎌倉之号、而因所祭祖神之本領、氏族皆改長尾也未孫供奉宗尊親王、來于鎌倉而移于上州白井、長尾氏之祖也、四男景通、住梶原、改号梶原權太夫、是梶原氏之祖也、五男景政、号鎌倉權五郎、文武兼備之勇將也、九歲之時力超人、故自十歲而向戰場也、永保年中与父兄徭奥州、數回先登、顯勇功義家甚感之、厨川城攻戰之時、書島海弥三郎之姓名征矢、來中景政左眼、向兄為通曰、拔此鏃、為通駭而不脫沓而踏額、欲拔之、景政忽拔刀為伐、為通問故、景政忿然答曰、於戰場中矢者勇、士之譽也、胡為以足否、於是、為通笑而屈膝、以手押頭、直拔鏃、景政納之胡腋、竟斃之射殺島海、我軍敵兵共無不感之、維時景政十六歲也、忠通卒後、將其兵、倍勵軍忠矣其武功、不遑枚舉依奥羽戰功之賞、寛治五年賜常州之二郡奥州之白河石川安積田村岩瀬領、而住石川郡高貴郷鎌田城矣、康治二年九月十八日六十八歲而卒去、既葬於三城目郷永福寺、贈号東光院殿内明永通大居士、諸忠通之靈神于南台山、又景政謂平生之神武、謂一家之始祖、並祭靈神于同山、俱以為氏神也、於鎌倉先是、勤長尾郷、亦加祭之矣、四代之苗孫長尾新六貞景、同平宗盛、而叛頼朝、

故治承四年没収所領、而三浦義澄預之、翌年依免許、移于野州足利、是足利長尾氏之祖也、抑所以崇祭御靈宮者、寛治五年義家征平奥羽之逆徒而歸洛陽、為通景成景通景政同參洛而到于景村之一条亭也、此時堀河院被賞軍忠、兄弟五人奏曰、亡父忠通為副將、輕身命、枕甲冑、余七旬死陣中、年來之勇略、亦所知于世也、是以請祭靈神、則蒙詔賜御靈宮之号、故建神社于長尾郷、為兄弟五家流之氏神也、後加祭兄弟五人之靈神、以永為伝勅号、云忠通於御靈宮、其余或云五靈宮、或云五流宮也、如並祭為通于三浦、景成于大庭、景村于白井、景通于梶原、景政于三城目及足利、後各勸請之、於其領所、而以為氏神、祭之、爾、往遷來之地多焉、譜曰、忠通生神者江島弁財天也、由是每歲十月己日、後孫祀奠御靈宮也、又氏旅不乘芦毛馬、是以弁財天、十二天之内也、又不喰鯨、始祭御靈之宮地時、堀丸井、八井水涌、一井潮生、有鯨、是依弁財天影向之奇瑞也、伝曰、永福寺以景政之廟所、後改、景政寺、号東光院、祭礼、以忠通景政之忌月日、九月十八日九日兩日行之、景政一生所持軍配团扇、黑骨扇、為神物存於今、其中写十一面觀世音梵字、片時不忘者、觀音力也、是以密為垂跡、此法亦行之矣、武門之守神、而有討放之志者、及患目疾者、祈于此、必得感応也、別当職台宗伝統兩部之神、所修之也、又于世有名御靈宮者、所祭或曰岐神、疫神、或曰八所御靈、是名同歟異也、系譜縁起伝書等、參

考之、以記之、

維時貞享竜集甲子、景政寺住持法師權大僧都、齋海阿闍梨勵再
奧之功、而神宮、拜殿、瑞籬、華表、悉造改之、

往昔宮領何時退転、天正中中、伊達政宗卿、雖有寄之地、亦因
事除之、故欲供田而達之於白河城、於是大守源忠弘君許附之、
以置宮夫、祭祀動行無怠慢矣、多年欲納伝記、而藏書、及求写
相州鎌倉御靈宮之縁起、羽州米沢長尾氏之系譜、且經歴京都長
尾曰井足利、其余御靈宮建立之地、間事跡、而以示之千余故合
老謹記焉、

檀家 八十一戸

什宝物 阿弥陀仏木像子安地藏尊木像長一葉師如来木仏立像長
入 毘沙門天木像長六寸厨子 金銅仏長一寸 十六善神画像一幅涅槃
画像一幅軍配团扇鉄扇甲冑縁起一卷系図一卷（以上五品は御靈宮
と共有か）

十五、矢 吹 町

八幡山
正明院 大 福 寺

矢吹町大字矢吹字西側にあり境内三百七十九坪官有地堂宇、明治
四十一年罹災現今仮屋なり門前相對して阿弥陀仏及地藏尊の金銅
仏像あり共に長四尺七寸、

新義真言宗豊山派、本山は大和国長谷寺なり。

本尊、阿弥陀如来 木仏座像長一尺厨子入 享保年間回録の災に罹り
正保二年会田正信寄進

旧記焼亡して縁起詳ならず、

檀家 七十戸

寺有財産 田四反五畝歩、畑一町一反三畝歩、山林七町歩

三峰山
延寺院 山 王 寺

矢吹町大字大和久字大和内にあり境内二百六坪官有地本堂 縦五間
横七間
半山門方三間

新義真言宗、白河町竜蔵寺の末寺なり、

本尊、不動明王木仏立像承応元或云
三年年正月十四日建立と云ふ縁起
詳ならず、

檀家 四十七戸

寺有財産 宅地二畝歩、田一反五畝歩、畑五畝歩、山林一反三畝
歩

阿 弥 陀 堂

矢吹町大字大和久字古山王にあり境内三十九坪民有地本堂 縦九尺
横七尺
石段二十七階

本尊、阿弥陀如来 縁起未詳

信仰者 四十四戸

愛宕山
長寿院 幸 福 寺

矢吹町大字中畑新田字西浦にあり境内二百三十六坪官有地本堂 縦
四間四尺
横五間三尺

天台宗叡山派、本山は京都比叡山延暦寺なり、

本尊、釈迦如来 慶長十巳巳年四月二十三日自伝法印開基と云、
白河風土記には本尊、不動尊木仏立像長二尺運慶作 慶長年中真海と云僧開基
と見えたり、

檀家 四十七戸

〔大4刊「西白河郡誌」抜粹〕

四二一〔大正一二年柿之内の寺社〕

〔曹洞宗 長徳寺〕

長徳寺は大字柿之内にありて曹洞宗に属し、瑠璃山と号す、蓋し
本尊仏の薬師如来に因めるなり長沼町永泉寺の末寺にして天文八
年三月心操全忠和尚の開創する所と伝へ、二階堂氏の麾下高林義
景を〔法号長徳寺殿傑心宗英大居士〕開基とす。所有反別六反歩
余、檀家百五十四戸

〔五竜神社〕

村社五竜神社は大字柿之内字大野原二番地にありて、伊弉冊尊
速玉男尊及び事解男命をまつる由緒不詳にして境内末社五座氏子
七十二戸を有し十月四日を例祭とす。

〔赤津神社〕

小社赤津神社は大字柿之内字長場七十三番地にありて伊弉冊尊、
速玉男命及事解男命をまつる例祭十月十四日

〔熊野神社〕

小社熊野神社は大字柿之内字宮下百三十五番地にありて伊弉冊尊
速玉男命及事解男命をまつる例祭十月十日

〔大12刊「岩瀬郡誌」抜粹〕

四二二〔戊辰戦没者大福寺過去帳〕

慶応四辰五月初四日

真雄道賢居士 会藩 二木 理 助

同年 五月二十日

蓮阿道繁信士 会藩 国 府 辰治郎 組下

千吉 年三十四才

同年 五月二十六日討死

寛成道夢信士 鈴 木 鉄五郎

同 同

智晃道遊信士 金 吉

右兩人会藩小兵組

同年 七月十五日

誠篤院連忠道義居士 会藩四ノ丁 丹 羽 新 吾

但根田村ニテ討死 当寺ニテ回向計致ス

同年 九月十八日

義性院英山泰雄居士 会藩 笹沼泰造コト

慶応四辰六月十二日

顯勇意居士 会藩 田原助作

年二十八才

根田村ニテ討死首ハ本国へ送ル胸許当寺へ葬

同年 六月朔日

則成道果信士 会藩 国府辰治郎組

義集隊小頭米藏組下

千之助コト年二十才

同年 六月十二日

智覚道勇信士 同義集隊望月新平組

小西弥三郎 年二十二才

同年 七月二十五日

義岳道光信士 同組 鈴木梅吉 年三十三才

同年 六月十二日

善林道栄信士 鈴木林治郎 年二十二才

同日

頼円道覚信士 浅草啓助 年三十才

右兩人 福島藩 浅草宇一郎家来

慶応四辰年五月二十七日

賢雄道覚居士 田中兵衛 年三十六才

仙台大松沢掃部輔 組下

同年 五月二十六日

真善道忠信士 仙藩 小片丹八郎 組下

金子久作

同年 五月二十六日

円勇道徹信士 仙藩 大沼寛左衛門 年二十三才

芝多 贊三郎 組下

同 六月十二日 討死

誠忠道念居士 同 菊地喜三郎 武通

年二十四才

同 六月十五日

暹營道勇居士 同 渡辺秀三郎 組

竹村哲治コト

同 六月十二日

義岳良禪居士 仙台水沢藩 石田嘉吉

仙台水沢藩

義岳道勇居士 隊長 星藏人太

真譽了善居士 佐藤勝之丞

義雄道显居士

同 順治

高橋利平

佐藤雄治

小野 伝右エ門

後 藤 善之丞

菊 地 卯兵衛

守 谷 久 藏

小 原 直 治

青 木 千代松

石 田 嘉 吉

小 沢 栄 藏

高 橋 喜代藏

同 新五郎

同 新之助

以上

右同年六月十二日討死

当寺へ形見ニテ葬上下十六人

参考 水沢藩の従軍日誌に八幡山大福寺松の根方に葬るの記載ありと聞く

(注) 第4編近世4 戊辰戦争の項に抜けたのでここに所載する

【中町 大福寺文書】

四二三〔明治二年一月大福寺檀徒定メ書〕

定 書 之 事

一 当寺檀頭之家柄も段々及零落万端不行届ニ相成寺中も大破ニ相成取立方行及兼候ニ付此度為寺世話人八人相立候然上者不寄何事寺懸之義者向後諸普請等引請可被申取計候事

一 為其賞八人之家内へ院号清居士之法名ニ相改直候間住職替ニ相成候共不可有異義候事

一 右八人法名相改候ニ付為後世金十兩為祠堂金相備置年々利足取立不拘不幸之有無毎年時々住職へ金二兩ツ、相調置候筈若世話人之内ニ不幸有之節者右納金ニ而葬送取行候事仍而其節格別之導師布施等ニハ不及候懸錢等ハ施主可被任意事

右之条々等中立行候上ハ寺檀之大幸故互ニ不可有異却候条仍而如件

明治二巳年十一月 大福寺

佐久間七之右衛門殿

熊 田 勘 十 郎殿

近 藤 吉 藏殿

野 木 長 五 郎殿

中 西 喜 右 衛殿

同 喜右衛門殿

大 野 義 三 郎殿

四二四〔明治二年採灯大護摩修行廻文〕

廻文ヲ以申達候

然ハ此從朝廷被仰出候ニ付京大本山より天下泰平五穀成就万民快楽之多メ一同上京御用參勤御祈禱可致旨御沙汰相成候付節柄難決之趣年行事一同より願立ニ相成右等之処御間届ケ濟之上當六日より三日之間白河表ニおいて採灯大護摩修行有之天朝与献札候条配下一同江不洩様相達心得違無之様急度相心得

明治二年巳八月五日享之

別紙通り候仕度ハ勝手次第すゝかけ持合候 院ハ持參可致候 六つぶさけさ有之院ハ持參可者之候 此度不參においてハ後に修驗奉行より御取調ニも可相成候被召候間不參無之様出勤可成候以上

〔根宿 赤塚家文書 鈴木宗次郎所藏〕

四二五〔明治三年三月三城目村御靈社・八幡社祭事出入二付

願書〕

乍恐以書附奉願上候

当県 御支配所白河郡三城目村惣鎮守御靈神社之儀者寛治三巳年鎌倉権五郎景政之靈勸請仕候神社ニ有之候右鎮守別当職之儀者南

台山東光院景政寺別当ニ有之候処延享三寅年及大破再建ニ相成其節皇子八幡神主岩谷筑前と申者御靈神社遷宮之儀ハ神主持ニ有之候杯と申之候より彼是及混雜候ニ付其段別当景政寺より其節御領主松平越中守様江御届奉申上候処双方共御呼出し相成御吟味被仰聞候処筑前義由緒無之者ニ付非儀ニ陥り其節双方に御書下御渡ニ相成証拠所持罷在候今般

御王政 御一新ニ付神仏混淆不相成御趣意ニ付僧分ニ而者御靈神社之守護難相成依之去ル巳三月中東京表江登弟子昇復飾為致長尾要と相改御許狀頂戴仕一社神主被 仰付神勤罷在候処同村皇子八幡神社神主岩谷礪志義去ル巳九月登札之砌幣帛注連等之切替自儘ニ致し猶又十月二十八日岩谷礪志義宮内ト申者合鍵出来神前押開勝手ニ神勤可致処景政寺元弟子楠貞雄居合曾合鍵并大鼓子右二品預り参り要方江相預ケ申候処岩谷礪志弟伝作と申者要方江利不仁ニ踏込石大鼓子手儘ニ引取申候ニ付此段当県御役所江御訴訟奉申上候処岩谷礪志義御沙汰中東京表江登り御許狀頂戴致し候趣ニ而旧蠟中引取申候趣當春ニ至リ右為 御披露尊県江罷出仕僧有無之惡名御訴訟奉申上候款致し景政寺御呼出相成御靈神社之儀遂ニ蒙リ 御糺候ニ付先規より別当仕来候謂住僧より巨細奉申上候然ル処石河郡外楨村神主吉田隼人内々取嚙致し度旨申出候ニ付御上様江厚御苦勞筋ニ相成も重々奉恐入候猶又先方御許狀頂戴致し参り候趣申之ニ付無拠熟談之任嘆ニ内濟仕候由ニ御座候右ニ付

御王政之御政事規矩如何敷実正とハ難相心得奉る候且又岩谷盛志義ハ氏子一同不寄意之由申參り要一手持ニ可致呉様氏子一同之頼ニ付此段御訴訟奉申上候間何卒正露決白之御利解被 仰聞右願之通御聞濟被成下置候ハ、一同平和ニ相成無此上重々難有仕合奉存候以上

白河郡三城目村

神主長尾

代赤塚静衛印

鎮守

世話人忠藏

同
文吾右衛門

白河県

御役所

四二六〔書簡〕

(笠石村 小貫俊光より御支配用係御中)

以折聞申上候先頃中皇大御神大蔭以割合御授申候処当十三日迄拙者出発イタシ初穂頂戴可申ノ所此種より不快ニ付無余義夫之者差上候間小前名付帳一日此者江御渡被下度奉願上候尤今ニ御取立無出分は明日中急度拙者方江乍御勝手御届被下度は亦奉願上候猶石川会所追而嚴違有候処不都合之義ト御申間も御座候条且又悲文

同
吉治郎

同 丑太郎

長百姓
紋三郎

同
藤
四
郎

組頭菊蔵

同 勇左衛門

同
米
藏

同 猶右衛門

兼帶庄屋
新十郎

同
弼市右衛門

〔三城目 猪合正男家文書〕

此度奉願上候也

追而先月中御願置候中教院献納金二戸二錢ツ、之義と嚴重ニ御達も待兼候間今般御取計此者へ御渡奉願上候且又御願ハ此夫之者時節ニ相当リ候ハ、一食一泊御取計被下度奉願上候右数カ条偏ニ奉願上候以上

十二月十七日

笠石邸 祠堂

小貫 俊 光岡

中野目村[㊤]

松崎村

大畑村

中畑村[㊤]

内新田村

右御支配

用掛御中

〔新町 佐久間二家文書〕

四二七〔書簡〕

追而寒冷ニ御座候各々様方弥御勇健ニ御動役大慶至極ニ奉存候
擬其則參上種々御馳走被下難有仕合奉存候 然者願置候一戸二錢
ツ、頂戴之儀院中より追々御催促有之候ニ付当三十日迄中教院江
致持参度事存候間御取立被下候御村方ハ乍御苦勞様以人拙者方江

御逗り奉願上候得取立不相成義ハ当二十五日迄御取立被下度奉存候ハ、參上致頂戴候間此段不惡御承知之上御計被下度奉願上候也

笠石村 祠 掌岡

新田村 佐久間様

中畑村 岡崎様

同 小針様

大畑村 青木様

松崎村 小室様

中野目村 円谷様

〔新町 佐久間二家文書〕

四二八〔明治五年幸福寺仏器什物調書〕

十四小区

石川郡中畑新田村

愛宕山 幸福寺

無住

一本寺不動明王 但木像

右者今般仏器什物等取調可差出故御布告承知奉候得共更ニ仏器什物等無御座候依而御届奉申上候以上

明治五壬申年九月

檀中惣代 渡辺惣兵衛

盤前県

御役所

戸 長小針鎮平

明治十一年十一月二十二日

〔本町 熊田俊一家文書〕

〔新町 佐久間一二家文書〕

四二九〔明治一一年大福寺所有地が地租改正により村共有地と

なりし故復地願〕

復地願書

一御殿山

一ヶ所

一鈴木六津次郎家作地

一ヶ所

一学校家作地

一ヶ所

右明治九年地租改正ヨリ前書大福寺所有地当村用係リ長尾半蔵ナル者ノ取計ニテ大福寺兼務滝田杲井寺世話人共無沙汰ニ一村共有地扨ト相唱暖味ノ申分不分明ニシテ其実不相分依テ前願ノ地所貸地ニ致シ右ヲ以テ大福寺活計ノ法方ヲ相立罷在候処今般一村共有地ニ被致候テハ至極難渋仕候ニ付

右用係リヘ御説諭ノ上復地ニ被仰度奉願上候以上

等九区白河郡小田川村宝積院住職

宮川通貫園

同区 同郡矢吹村大福寺担中惣代

近藤卯左エ門郎

四三〇〔明治一八年大福寺所屬に関する願など〕

御加末願

福島県磐城国西白川郡矢吹村

大福寺

右寺儀從來磐城国西白川郡小田川村宝積院末寺ニ有之候処同寺離末ノ上御山直末ニ加度数年来ノ宿願ニ御座候処僥倖哉今般御貫主大教正殿当地御巡幸ノ折柄本寺及ヒ同末并ニ檀家一同示談行届候間貴格ノ御仕愛ヲ以檀家ノ宿願御聞届被成下御直末ニ御差加被下度此段懇願仕候也

右兼住職 ○ ○ ○ ○ ○ 印

但寺惣代

何寺住職 ○ ○ ○ ○ ○ 印

大福寺檀頭 熊田勘十郎 印

外四名

真言宗大本山

長谷寺執事 御中

離末承認書

福島県磐城国西白川郡矢吹村

大 福 寺

新蔵派事務所

御 中

檀寺惣代 木下信 祐

会 田惣左エ門 印

佐久間 七 郎 印

右寺儀從來拙寺末寺ニ有之候処今般貴山直末ニ相成度旨檀家一同宿願ニ御座候条拙寺ニ於テモ随寺仕候間檀家之懇願御聞届被成下御山直末ニ御差加被成下度仍テ承認書如件

福島県磐城国西白川郡小田川村

本寺 宝積院住職

職 性 名 印

請 待 書

一今般大福寺住職真伯了泰殿粹衝村長楽寺ヨリ請待ニ付移転ニ相

成依テ後住儀貴僧事檀家一統飯別心無之候条為其請待書如件

明治十八年一月二日

大本山

長谷寺 執事御中

磐城国西白河郡矢吹村

扣取 大福寺現住

特別住職則伸願

福島県磐城国西白河郡矢吹村

新蔵派一屋格院 大 福 寺

真 伯 了 泰 印

惣代人 仲 西 卯 藏 印

同 佐久間七右エ門 印

同 野 木 長太郎 印

同 佐 藤 文次郎 印

同 会 田 嘉 助 印

檀 頭 大 野 倉 吉 印

同 芳 賀 耀太郎 印

同 近 藤 卯左エ門 印

右寺無住ニ付同県田村郡谷田川村長命寺住職御師菅野高皓ヲ以住

職為致度然ルニ本人職級不合格ニ候得共不得止事情有之候ニ付キ

□□□下則伸被成下度此段奉願上候也

右寺檀家惣代 熊 田 勘重郎 印

大 野 喜 助 印

大 野 倉 吉 印

安積郡郡山村

如宝寺法類

藤井信源殿

同 会田惣左門^印

同 大野喜助^印

檀頭 熊田勘十郎^印

〔本町 熊田俊一家文書〕

四三一〔明治一一年三山敬愛教社札〕

〔表面〕



三山

敬愛教社

敬愛教社山印

〔裏面〕

福島県第九区磐城国白河郡

矢吹村

明治十一年五月入社^印

渡辺治平

二十二年

〔中町 渡辺泰助家文書〕

四三二〔明治一一年神風講社世話係辭令〕

第四百八十九番

神風講社

世話係

右之通撰定

候事

明治十一年七月二日

神宮教院

〔中町 渡辺泰助家文書〕

四三三〔神風講社札〕

〔表面〕

福島県下

磐城国西白河郡矢吹村

二十二番地居住

渡辺治平

安政四丁巳年六月十四日生

第四百八十九番神風講社

〔裡面〕

神宮教会

〔中町 渡辺泰助家文書〕

四三四〔明治一四年一月出雲講結社宣伝文〕

委任状

中畑村八幡神社

部下村々

右ハ今般出雲教会講社之件御委任有候不日大野大講義御出張ノ
節本旨御聞見ノ上及取斗可御座有候也

兼務伺掌

十四年一月二十三日

權訓導 小貫俊光

中畑

赤塚重親殿

〔根宿 赤塚家文書 鈴木宗次郎所藏〕

〔解説〕 明治政府の政策の転換により政府神祇省廃止となり、明治神道十三派の派生時代における神道教派の拡張宣伝中の資料として珍らしい。

四三五〔明治一五年出雲大社教会札〕

第十九番

出雲大社教会

福島県管下磐城国

西白河郡矢吹村

明治十五年八月十四日入社

渡辺治平

〔中町 渡辺泰助家文書〕

四三六〔明治一五年出雲大社教会世話掛辞令〕

渡辺治平

出雲大社教会

世話掛タルヘキ事

明治十五年八月九日

出雲大社教会

大社教会

〔中町 渡辺泰助家文書〕

四三七〔明治一五年出雲大社教会矢吹村仮事務所出納担任仮辞令〕

令

仮辞令

渡辺治平

矢吹村大社教会仮事務所出納担任
有之度候事

明治十五年八月十七日

出雲大社教会印

出雲大社福島県分院長

大講義 大野 泰

〔中町 渡辺泰助家文書〕

四三九〔明治四十二年矢吹神社氏子惣代当選通知書〕

氏子惣代当選通知書

貴下矢吹町第一区氏子惣代ニ当選致シ

候ニ付此段及御通知候也

明治四十二年九月七日

矢吹町第一区長 藤田 忠助[㊟]

〔中町 渡辺泰助家文書〕

人民信仰スル宗派の現況

宗教

四三八〔明治二〇年西白河郡第三区人民信仰〕

第一区ト大差ナシ

寺院ノ数及其宗派ノ区別

曹洞宗

十一

真言宗

十三

天台宗

四

日蓮宗

一

教会所ノ数及其宗名地名

教会所

一

出雲大社派大教派 矢吹村

基督教ノ行否

行レス

〔県庁文書F一〇五九 明20「民度区域画調上申綴」抜粋〕

四四〇〔昭和二十三年聖書研究会〕

聖書研究会大きく発展、青年部、女子青年部が結成された。道義の頽廢が叫ばれておる折、矢吹をして聖地たらしめん位の理想はもって欲しい。

〔昭23・8・29「やぶきタイムス」抜粋〕

既報聖書研究会青年部アンデレ会は八月一日矢吹町会田女子学院に第一回総会を開き、今後の維持、運営、会則決定、バザー（女子小百合会の後援）等の協議した。なお役員は会長沢田陽一、副会長中島了、会計玉川真吾、書記田村熙一郎の諸氏、顧問として関根要八、平居芳三郎、木村光二、山田英太郎の諸氏と決定した。

〔昭23・9・5「やぶきタイムス」抜粋〕

四四一「昭和二十四年矢吹町キリスト教信者の分派」

聖研から脱皮

矢吹町聖書研究会はこの程純然たる聖書研究会、信者のみによる聖公会、日本キリスト教団の二派に別れる事に決定。聖公会は同会信者三十余名が郡山聖ペテロパウロ教会矢吹会衆として東北主教中村氏の指令により認められたので、毎月二回第二、四日曜、郡山加藤牧師が来矢集会する連絡所は矢吹町善郷内原（旧飛行場内）沢田陽一氏の所になっている。日本キリスト教団では矢吹伝導所を設立、須賀川本川氏が来矢、毎週土曜日集合するが聖研は依然の通りである。

〔昭24・1・29「やぶきタイムス」抜粋〕

四四二「ラクーア伝導のセンター矢吹教会」

△ラクーア伝道 戦後のまだ混乱期に、ハープ、マリンバによる音楽隊を引き連れ、元進駐軍チャブレン・ラクーアが昭和二十五年六月から十二月まで国内一万四〇〇〇キロにわたり二〇〇回に近い集会を開いたことは戦後のキリスト教史に耳新しいことである。戦後における県下のキリスト教活動および教会の発生に、その後に設けられた「ラクーア伝道」のことをあげる必要がある。

この発生に当たっては、猪苗代湖の「湖畔聖書学校」の存在に

ついて触れなければならない。昭和二十一年十二月から翌年三月までの四カ月、翁島の高松宮別邸において松前重義（現東海大）により「日本国民学会英世学園」が開校された。講師としては、大谷英一・高坂正顕・西谷啓治・鈴木成高・明本京静らであり、その聖書講義は遠藤栄が当った。不幸にしてこの開講中、責任者の松前は公職追放で表面に立てなくなった。それで、これの継統として、同年八月から遠藤栄を校長とする「湖畔聖書学校」が発足した。昭和四十年現在第十九回の開講をみているが、その間、松前重義はいうに及ばず、新教出版社社長長崎次郎・日本聖書協会総主事都田恒太郎らがこれを援助した。第七回の講師として来たものに、キリスト新聞社長武藤富男があつたが、彼の提案に基づき、本県における「ラクーア伝道」が企画されたのである。昭和二十八年、県下のおもな牧師が飯坂「みちのく荘」に会合して準備協議を行なった。その会合者は中央から武藤富男を迎え、深瀬忠蔵・本宮幸四郎・遠藤栄・丹忠・村上東・成瀬高・馬場慶一郎・宮島久太郎・吉池みつ・井関磯美らであった。二十九年から以降六年間、この伝道は本県下の辺地ともいべき地を選んで展開された。その最終年度までに一〇の教会堂建設をみている。第二年度からは京浜地方・阪神地方にもこの運動は広がり、「日本基督教協議会、宣教百年記念運動」の一翼として組み込まれた。本県でセンターに指定されたものは

△中通り―保原・福島荒井・矢吹 △浜通り―相馬鹿島 △会津―本郷・山都・猪苗代・只見・田島（第一年度のみ、三春、第三年度までのもの石川）であった。この期間、夏の二カ月間、アメリカの主要都市の牧師が夏の休暇と費用をささげて奉仕した。その数は六年間延べ組六十名であった。

このラクーア伝道の記録には、武藤富男編著『ラクーア特別伝道記念写真集』（昭和三十四年九月一日発行キリスト新聞社）があり、その付録に武藤富男・ラクーアの文がある。なお、遠藤栄手記『蛙の声―田舎伝道者の手記―』は、このラクーア伝道の裏面史を描いて興味がある。

県下宣教師の働き 最後に宣教師の働きにかんして二、三のことを述べておこう。婦人宣教師としてミス・A・アンダーソンを知らぬ人はないであろう。本県の中通りの高校生、大学生の英語バイブル・クラスの指導に戦後一貫して当たり、須賀川・白河、郡山・二本松・鏡石・川桁、信夫の伝道を援助した。

昭和三十九年から白河市郊外の開拓村川谷に定住し、自ら保育園を設けて晩年の伝道に進んでいる。

〔福島県史第21巻第二編「抜粋」〕

四四三 〔昭和二十九年外人宣教師矢吹町を観た感想文〕

私の観た矢吹町

ボーダーメソヂスト教会牧師

チャールス・M・セックストン

私は結婚はしているが子供はない。従って子供が大好きである。矢吹は大変親しみ深い街であり、又、人々は親切で、初めて来た私を喜ばせています。

私達はこゝに滞在している間に、この町のお役にたつことを希望いたします。毎日の雨にもかゝらず心は晴れ／＼と暮しています。

私達が来たことに対して大きな好意をよせて下さった関根夫妻に感謝と讃美を送らずにはいられません。

ワシントンハイスクール教授

トーマス・A・ロップ

矢吹の町の人々は皆親しい礼儀正しい人であるという印象を受けた。特に教会に来る若い人々に深い感銘を受けた。その人達の向学心、又キリストに関する興味には注目すべきものがある。私は人種とか国家とかを越えて、キリストにあって、矢吹の町のすべての人々と最もよいお友達になることを心から期待しています。

矢吹伝道所教師 中 村 清 信

太陽に祝福された町——六月中旬に始めて矢吹の町に立つた時の印象でした。真直ぐな街路、広々とした畠地、美しい森——、この自然のいぶきの中に言ひ知れぬあこがれと愛着とを禁じえませんでした。それにも増して町の人々の温かさは、ある外人宣教師をして「世界一小さい教会」というニックネーム（愛称）を残さしめた矢吹伝道所に専任する私の心をどんなにくつろがせてくれたことでしょう。ニックネームそのまゝに、小さいながらも本当に人々から愛され親しまれ、町のマスコットになり、隣人の心を結び愛を伝える地の塩として、いくらかでも働かせていただければ、幸ひこれに越したものはございません。

〔昭29・7「教育やぶき」抜粋〕

四四四 〔日本キリスト教団矢吹教会沿革〕

宗教法人日本キリスト教団矢吹教会

（代表役員 淵田 勝）

創設期 戦時中町内に疎開していた故関根要八氏が酒井占雄氏らと戦後の青少年の心の荒廃をなげき、日本キリスト教団須賀川教会本川直躬牧師を招き、昭和二十年十二月十八日農業会二階で聖書研究会を開いた。その後、現石川トタン屋、筑前屋旅館などを借用して会場とした。

昭和二十三年ころ会田キン氏宅で聖書研究会を続行する。白河信用金庫の矢吹進出に伴い、御殿山に土地を取得、教会堂（3間×4間）を建設。昭和二十九年ラクーア伝道のセンターに指定される。

昭和三十一年四月二十三日 第二種教会を設立、須賀川教会矢吹伝道所となる。

昭和三十三年 丹牧師を迎え教会の新たな建設にのりだす。

昭和三十四年 矢吹町大字矢吹字的場七番地に教会堂建設、聖和幼稚園を併設。

昭和三十六年三月二十日 宗教法人日本キリスト教団矢吹教会設立。

〔矢吹教会沿革より〕